

宋詩より見た宋代の茶文化

高橋忠彦

目次

I 前言

II 宋代の茶詩概観

1、梅堯臣の茶詩

2、歐陽修の茶詩

3、蘇軾の茶詩

4、黄庭堅の茶詩

5、楊万里の茶詩

6、陸游の茶詩

III 宋詩に見る茶の諸相

1、団茶に関して

2、点茶に関して

3、草茶に関して

4、煎茶に関して

IV まとめ

I 前言

筆者は以前、「唐宋を中心とした飲茶法の変遷について」⁽¹⁾を著わし、中国の飲茶方法の変化と発展について、概略

宋詩より見た宋代の茶文化

を述べることを試みたことがある。

その中でも指摘したことだが、宋代の飲茶文化は、他の時代と比較して、大きな問題をいくつか抱えている。

第一に、福建の北苑を中心として生産された固形茶（団茶）は、その製法上、極めて特異なもので、その実態を解明しない限り、詩文に表現された形容も理解できない。ただ、これについては、その製法を述べた茶書⁽²⁾が存在する⁽¹⁾ので、手がかりは有る。

第二に、福建団茶の飲み方として發達した点茶法も、茶書の記述から察せられるように、茶の品質の微妙な高下の鑒別などを行なう高度な文化を持っていた。これについても、断片的な記述から推測するしかない。

第三に、宋代の茶書は、団茶と点茶法のみを扱い、そこに記された内容が、どの位普遍性を持つのか確認できない。

第四に、それと関連するが、福建の団茶文化に属さない茶文化も宋代には存在したであろう。団茶以外にも、名茶と称された草茶（葉茶）が早くから存在していた。

第五に、宋代においても煎茶文化が存在し、溯っては唐の煎茶と関係し、下っては明代以降の泡茶⁽³⁾につながっていると思われる。

第六に、もし、宋の煎茶文化が、明の葉茶を泡茶で飲む文化につながるものであれば、葉茶を煎茶で飲む型式が、宋代の頃に存在することが考えられる。

本稿は、以上の問題を念頭に置きながら、茶書等で充分でない所を補う資料として、宋詩を主に用い、宋代の茶文化の全体像を考えようとしたものである。ところで、詩を資料に用いたのは、茶詩つまり茶を題材とした詩が、か

なりの数存在し、その文学的描写が、往々にして、現実の細部を描いていると考えるからである。この考えには反論もあるであろうが、次の点から詩の資料的価値は、ある程度確認できるであろう。

これは、既に入掲論文および「唐詩にみる唐代の茶と仏教」⁽⁴⁾で見たことであるが、例えば、唐の茶と宋の茶に、製法上の差があるとすると、茶の形状を詠んだ表現にも違いが生ずるし、唐と宋で飲み方に違いがあると、(例えば煎茶法と点茶法)茶湯の描写にも変化があらわれてくる。結果として、唐の茶詩には茶湯の花の黄緑色を強調した表現が多く、宋の茶詩には、乳白色の茶の色を詠んだものが多い。これは、恐らくどの時代についても言えることではなく、唐と宋の間に、急激な茶の変化が生じたことによる現象であろうが、本稿が宋の茶を取り扱う限り、詩を一定の参考にすることは可能であると思う。

また、この問題も既に論じたことだが、中国の茶文化といっても、階層による差は極めて大きいものがあつたに違いない。資料を詩の製作者である知識人、士大夫層に限定すれば、それは、その階層の茶文化をとらえる結果になり、無意味なこととは言えないであろう。特に、この層は、各時代の茶書の作者、すなわち、各時代の最も高度な茶を扱う人々と重なり合うのである。

以上の観点から、宋代の茶の具体的様相を、宋詩の資料を用いて調べたのが、以下の論述である。

第一章においては、宋を代表する詩人の中から、まとまった数の茶詩を残している者を選び、各人について、茶に対する見方を検討した。梅堯臣・歐陽修・蘇軾・黄庭堅・楊万里・陸游の六人を取りあげたが、時代的には、北宋の梅堯臣と歐陽修、蘇軾と黄庭堅、南宋の楊万里と陸游が対になる結果となっている。それぞれの作家の個性と、時代による差異の両面から、宋の茶文化の大まかな流れをとらえる可能性を探ったものである。

第二章は、六人の詩人の資料およびそれ以外の資料を用い、宋の茶の基本的な事項である団茶、点茶、草茶、煎茶について論じたものである。ここで用いられた概念は、上掲論文の場合と変りないが、以下の論述のために、ここで確認しておきたい。

ここでいう団茶は、福建産の固形茶で、建茶とも呼ばれる。その製法は宋代の茶書に詳しく、唐の『茶経』に見られる固形茶と比べると、全く異質といえる程、茶の粒子を細かくすりつぶして固めた茶である。点茶とは、茶を粉末にして器に入れ、上から湯を注いで飲む方式を言う。草茶は、宋代の江南産の散茶（葉茶）を言うが、主として名茶を指している。煎茶とは、茶を粉にひいて、（理論上は、葉茶のままでもかまわないが）沸かした湯の中に直接投じ、煮出して飲む方法を言う。⁽⁵⁾

II 宋代の茶詩概観

1、梅堯臣の茶詩

梅堯臣（一〇〇二—一〇六〇）が詩人として活躍した時期は、十一世紀前半である、これは、蔡襄が『茶録』⁽⁶⁾を著した皇祐年間（一〇四九—一〇五三）と重なり合う。梅堯臣自身が蔡襄と交流を持っていたことを別として⁽⁷⁾、宋代の典型的な福建団茶文化の完成期を反映する詩が多いことは当然といえよう。

梅堯臣の茶詩は、後述するいくつかの例外を除けば、ほとんどが福建団茶を扱っており、その形状・色彩・味わい

等についての細かな描写を多く含んでいる。同時に、『茶録』等に見られる点茶法の特殊な用語と同じ言葉または類似する言葉が多く、茶書を補う有用な資料となるであろう。

彼の「宋著作寄鳳茶」の詩は、作品の製作時期は早く、一〇四〇年頃であるが、既に、福建団茶に対する多角的な描写が見られる。ここで、重要な句を抜き出して説明を加えてみよう。「春雷未出地、南土物尚凍。呼譟助發生、萌穎強抽莖⁽⁸⁾」は、啓蟄前に早くも開始されたという北苑の茶摘みを詠んでいる。それも、「呼譟助發生」などの表現は、実際の様子を反映していると考えられる。たとえば『北苑別録』の「採茶」の項には「故毎日常以五更撾鼓、集群夫于鳳皇山」「監採官人給一牌入山、至辰刻則復鳴鑼以聚之」と記されており、太鼓や銅鑼を打ちながら、時間以内に採摘を終えるという、戦場のような光景が繰りひろげられたことが知られる。この詩は、その音を、万草を引き出す雷鳴になぞらえたものであろう。同類の表現は、歐陽修の「和梅公儀嘗茶」に「溪山擊鼓助雷声、逗曉靈芽發翠莖」とあり、同じく「嘗新茶呈聖俞」に「蟄雷未起驅龍蛇、夜間擊鼓滿山谷」とあり、互いに参考になる。

また、同じ詩の「団為蒼玉璧、隱起双飛鳳」は、団茶の形状を詠んでおり、「蒼玉璧」は、後述するように、常套表現ではあるが、光沢のある表面を言い、「隱起」は、鳳の模様が、団茶の表面に浮き上っていることを指するのであろう。団茶の製造工程では、銀や銅の範型に模様を彫ったものに茶を入れて固めるため、立体的な浮き彫りができるのである。ただ、団茶の模様そのものを詠んだ詩は多いが、「隱起」というような表現は少なく、貴重である。次の「独応近臣頌、豈得常寮共」は、団茶の入手の困難さを言う。

また、団茶の飲用と味わいや色彩を述べている句は、「石碾破微緑、山泉貯寒洞」「味余喉舌甘、色薄牛馬漣」などである。ここで団茶を碾でひいた色を微緑というのは、後述するように、宋初の茶詩の傾向であり、梅堯臣自身

も、後年の詩では「雪」の白さで表現している。茶の味を、舌に残る甘さに重点を置いて述べるのは、梅堯臣の個性であろうが、『茶録』にも「茶味主於甘滑」とある。「色薄牛馬漣」も、後章で論ずるように、茶の色が薄い乳白色であることの証言となっている。この詩には「雲脚俗所珍」の語も見え、「雲脚」が何を指すかは、後章で詳論するが、点茶法にともなう表現であり、『茶録』に見える語で、茶湯に茶の粒子が溶けた状態を言うものである。

次に「劉成伯遺建州小片的乳茶十枚因以為答」でも、建茶の一種である的乳茶について、「玉斧裁雲片、形如阿井膠。春谿開新色、寒籜見重包」と、具体的に表現している。例えば「阿井膠」の形は、現在では知ることとはできないが、当時の読者には理解できたであろうし、「寒籜」の語も注目に価する。この句と「李国博遺浙畫建茗」の「越茗苞越籜」の句が同様の内容だとすると、(9)（なお、この越茗は、浙江の茶でなく、建茗つまり福建団茶を指す）福建の団茶は、籜つまり竹の皮に包まれていたことがわかる。団茶を包装していたものとしては、箬（籜）の字がよく用いられるが、それと同じ物であると考えられる。

包装についても、さらに詳細な描写が見られ、「呂晋叔著作遺新茶」に至っては、「六色十五餅」つまり、六家の製茶業者の作った十五枚の茶について、「每餅包青蕚、紅籤纏素縑」と表現されており、当時の団茶が一枚ずつ蕚（蕚・箬と同じで笹の葉）に包まれ、白い糸で結ばれ、紅い札がついており、そこに茶名が記されていたことまでわかる。これは、『北苑別録』に見える貢茶の包装の仕方と比べ、共に箬葉を用いるものの、違った点もあるので、資料的に興味深い。なお、同じ詩で「屑之雲雪輕」と言うのは、上に述べたように、団茶を粉にひいた茶末の白さと微小さを表現した典型的なものである。

さて、梅堯臣の詩において、福建の団茶を点茶法でたてたその茶湯についての表現がどうであるか、その例を検討

しよう。「建溪新茗」に「粟粒烹甌起」とある「粟粒」は、後述するように、茶書に見られる、茶の表面の形容である。最も詳細なものは、「李仲求寄建溪洪井茶七品云愈少愈佳未知嘗何如耳因條而答之」であり、味見をしてほしいと贈られた七種の茶に対し、簡條書きで答えたというのである。その内容は「末品無水暈、六品無沈相、五品散雲脚、四品浮粟花、三品若瓊乳、二品罕所加、絕品不可議、甘香焉等差」と言うが、このようなランクづけは、茶書にすら見られないものであり、梅堯臣が点茶に詳しかったことを示している。ただし、二品と絶品については、具体的記述ではないし、他の等級のものも、必ずしも後者が前者より良いということではなからう。最後の「甘香焉等差」の句が全体にかかるとすれば、全て上等品で、差がつけられないということになる。末品から三品まで、茶の賞め言葉を並べたものと見る可能性もあろう。

実際、「無水暈」は、湯の表面に水痕が現われないことも解されるし、「無沈相」は、粗い粒子がなく、沈澱しないこと、「散雲脚」も、『茶録』の表現では良くない状態だが、単に雲脚が生ずるの意とも解し得る。「浮粟花」は、次章に述べる通り、茶湯の表面の形容であり、「若瓊乳」も、茶湯の乳白を言う一般的な表現である。従って、全ては点茶の茶湯を様々な角度から賞賛した言葉の羅列に過ぎないと思われる。

他の茶に比べて建茶の価値を認めている詩の例としては、歐陽修に和した「次韻和」および、歐陽修がさらに和した詩に答えた「次韻和再拜」の両詩がある。前者は、歐陽修が福建団茶および点茶文化を、俗夫の煎茶に比較して賞揚している（後述）のに和し、「此等莫与北俗道、只解白土和脂麻」と言って、北方の「白土と胡麻」で茶を煮る風習と比べて、点茶をたたえている。あわせて、歐陽修の品茶能力について、「歐陽翰林最別識、品第高下無欻斜」と述べているものである。

なお、ここで言う「脂麻白土」は、蘇軾の詩「和蔣夔密茶」に見える「脂麻白土須益研」、すなわち蜀の民間で行なわれていたと思われる素樸な煎茶法を指すのであろう。⁽¹²⁾

「次韻和再拜」の詩は、歐陽修が、今度は、江南の草茶との比較で建茶を賞めている（後述）のを受けて、やはり「誰伝双井与日注、終是品格称草芽」と言い、草茶の代表である双井茶と日注茶を低く見たものである。

以上の例から理解できるように、梅堯臣は、『茶録』に代表される北宋の点茶文化を体得し、建茶の価値を疑いないものと考えている。しかし、彼の視野が、建茶以外に向いていないわけではなく、他の茶を詠んだ詩の中にも、資料的に重要なものはある。例えば「答宣城張主簿遺鴉山茶次其韻」では、「鴉山」「顧渚」「蒙頂」「双井」「建溪」「日鑄」「天目」といった当時の名茶を網羅的に挙げており、その特徴をとらえている。これは一般の茶書には見られないことである。

また、建茶以外の名茶の重要なものである双井茶について、「晏成統太祝遺双井茶五品茶具四枚近詩六十篇因以為謝」の詩を詠み、細かな描写も残している。贈られた茶の礼を述べた詩であるから、双井茶を賞賛し、「鷹爪断之中有光、碾成雪色浮乱花」と述べる。葉茶である双井茶を白い茶末にひいて、恐らく点茶法で飲んでいるのであろう。また、「得雷太簡自製蒙頂茶」も、「湯嫩乳花浮、香新舌甘永」と言い、「乳」「甘」などの語彙は、建茶の形容とさほど変わりがない。ところで、この蒙頂茶も、「蠟囊收細梗」の句から見れば、葉茶であり、やはり茶末にして点茶で飲んでいるらしい。概して、建茶以外の茶については、その個性を真に描写したものではないのではなからうか。

2、歐陽修の茶詩

歐陽修（一〇〇七—一〇七三）は梅堯臣と特に親交が深く、蔡襄の『茶録』の序文を書いている点から見ても、梅堯臣と同様、北宋の福建団茶文化を代表する人間と見ることができるといえる。それは、彼の詩にも充分現われている。ことに、既に述べたように、彼が「嘗新茶呈聖俞」（『梅堯臣集』）では「嘗雜新茶言」を詠めば、梅堯臣が「次韻和」を作り、歐陽修がさらに「次韻再拜」を作り、梅堯臣が和して「次韻和再拜」を作っているが、この四首は、全て建茶を賞め賛えた詩である。この二人の詩は互いに補いあう関係といえるようである。

「嘗新茶呈聖俞」の前半は、建安の製茶がいかに早い時期に開始されるかを述べ、その新茶を人々が争って求める風潮を「人情好先務取勝、百物貴早相矜誇」と記しているが、そこに批判を読みとることはできない。「夜間擊鼓満山谷、千人助叫声喊呀」は、上述したように、採茶の光景であり、「終朝採摘不盈掬、通犀鑄小円復窳」は、小さな茶芽のみを用いて固形茶を作ることと述べる。下句は難解だが、完成した鑄（方形の固形茶）を通犀つまり犀角の白く透き通った部分に喩えているのであろうか。いずれにせよ、団茶の貴少なことを言っているのが、下文の「鄙哉穀雨槍与旗、多不足貴如刈麻」に対比させている。この両句は、通常の茶、つまり穀雨以降に採摘する槍や旗（芽と葉のこと）の大きな茶は、量が多くて貴ぶに足りず、麻を刈るようなものだと言っているのであろう。

ここで言う穀雨の茶は、啓蟄以前に、芽の小さいものだけを摘んで原料とする福建団茶に比べて、世間一般の茶を指すのであろうが、一方で、『茶経』の記事に見える唐の採茶の時期（「三之造」に「凡採茶、在二月、三月、四月之間」とある）の遅さをも意識しているのではなからうか。

というのは、この詩の次の表現にも、『茶経』の茶を貯めるような発想が見られるからである。「可憐俗夫把金挺、猛火炙背如蝦蟇」と言つて、俗人が、固形茶を金具ではさみ、猛火で炙つて蝦蟇の背のようにふくらませてから、茶末にして飲むことを嘲つているのであるが、これは明らかに『茶経』の「五之煮」に見える「炙茶」を指している。そこでは、「凡炙茶……持以逼火、屢其翻正、候炮出培壘状蝦蟇背、然後去火五寸」云々とある。つまり、唐の煎茶法においては、餅茶を充分にあぶつてから茶末にひくので、その目やすとして、茶の表面がふくれて、蝦蟇の背のような突起ができることを述べているのである。それに対し、『茶録』に徴する限り、宋の団茶は、特に新茶であれば、炙る必要がないとされている⁽¹⁴⁾。従つて、ここで「俗夫」に向けられた批判は、一方で、唐の茶より宋の茶が優れたことを述べ、一方で、宋代においても旧弊な煎茶法を用いる人々を譏るためのものではなからうか。この詩の「停匙側盞試水路、拭目向空看乳茶」の句を見ても、歐陽修が『茶録』の点茶を体得していることが知れるし（詳しくは後述）、それに誇りを感じている様子すら窺えるのである。

さて、この詩の続きである「次韻再拜」も、建茶を賞めたものだが、ここでは草茶との比較が目立っている。福建の人々が「每嗤江浙凡茗草、叢生狼藉唯藏蛇。（原注）世代茶園多蛇、嗜人不見療」と言つて、江南の草茶を軽蔑していると述べるが、これは、歐陽修の感覚でもあるのだろう。一方で、この詩は、団茶の美しさを様々に詠んだうえ、「手持心愛不欲碾、有類弄印幾成窠⁽¹⁵⁾」と、作者も含めて、一般に、団茶が有難がられた様子を述べている。歐陽修の「茶録後序」にも、仁宗期において、中書と樞密院の各四名に下賜された小団茶に関し、人々は「不敢碾試、相家藏以為宝、時有佳客、出而伝翫爾」であったと述べる。飲むための茶を、粉にするのが惜しく、ながめてなでるばかりであったというのは、愚かなことではあるが、歐陽修の口調には、やはり批判は含まれていないように見える。

ところで、歐陽修は、草茶の代表格である双井茶についても、詩と記事を残している。『帰田録』の中で、草茶を論じ、日注茶と双井茶が尊ばれ、特に近年は双井茶がもてはやされることを記すが、それと似た内容を詩にしたのが「双井茶」である。この詩の中では、双井茶がいかに世間に尊ばれたかを、「長安富貴五侯家、一啜猶須三日誇」と述べるが、この風潮を、彼は、批判的に詠んでいるようだ。つまり、続いて「宝雲日注非不精、争新棄旧世人情」と述べ、以前は尊ばれていた宝雲茶（杭州産の茶）と日注茶も、双井茶に劣るものでなく、人々の新しいものを追いつめるとめる軽薄さが、流行を生み出しているという口ぶりである。さらに「豈知君子有常德、至宝不隨時变易。君不見建溪龍鳳团、不改旧时香味色」と結んでいる。要するに、福建团茶は、日時が経っても、他の草茶とは違って、味が変化しないことを、君子の常德に喩えているわけで、論理的に見ればおかしな議論であるが、それだけに、作者の建茶を尊ぶ気持ちがいじみ出ている。従って、草茶を扱った詩を検討しても、歐陽修は、やはり团茶を重んじていることで一貫しているといえよう。

3、蘇軾の茶詩

蘇軾（一〇三七—一一〇一）およびその弟子とされる黄庭堅も、多くの茶詩を残しているが、世代的に梅堯臣や歐陽修より遅れるためか、北宋の建茶文化一辺倒でなくなりつつある様子が窺える。

蘇軾も、当時の一的的素養として、建茶や点茶には詳しく、その方面の詩作も多い。しかし、彼は一面で、煎茶を重視しており、「試院煎茶」の詩には、その主張が特に明瞭であり、北宋期の煎茶の残存を知るうえでは、貴重な証拠となる。この詩に対して、彼の弟の蘇轍が和した「和子瞻煎茶」の詩も残っているので、まず、その両者について

検討を加えたい。

「試院煎茶」の冒頭は「蟹眼已過魚眼生、颯颯欲作松風鳴⁽¹⁷⁾」であり、これは、釜で湯を沸し、その加減について、視覚と聴覚の両面から確認しているのである。彼の自注に「古語云、煎水不煎茶」とあるように、煎茶の伝統においては、水の沸し方を何よりも重んじる。これは、『茶経』にも詳しく記されたことである。また一方、宋代の点茶法においては、湯瓶が湯を沸かすため、その加減を目で見ることが困難である。これは、『茶録』に記された通りである⁽¹⁸⁾。従って、蟹眼・魚眼といった泡の大きさを示す、視覚的な表現は、蓋のない釜の水面を見つめていなければ成立しない言い方である。

次の二句「蒙芽出磨細珠落、眩転遶甌飛雪輕」は、茶を（どういう種類の茶を用いたかは不明であるが）粉に引いて湯に投じ、それを碗に汲み出した様子を述べる。磨（うす）の間から、細かな茶末がもやもやと落ちると言うのは、煎茶法とも点茶法とも解しうる表現であるが、甌（碗）の中で飛雪のような茶の花が転ずるといふのは、煎茶の描写と解した方が自然であろう。

何より重要なのは、次の「銀瓶瀉湯誇第二、未識古人煎水意」であろう。この二句は、銀の湯瓶を用いて湯を注ぎ、天下第二泉といわれる恵山泉⁽¹⁹⁾を有難がるような風潮があるが、それは古人の煎茶法が、水の沸かし方に苦心した心を理解していないのだ、と解すべきであろう。器や水質に、ひいては茶に金を惜しまない点茶文化を批判しているのである。湯瓶が、元来、点茶の道具で、煎茶には使われないことは言うまでもない。

ここで古人というのは、下文に「君下見、昔時李生好客手自煎、貴従活火発新泉。又不見、今時濬公煎茶学西蜀、定州花瓷琢紅玉」とあり、唐の李約と北宋の文彦博を煎茶家の例として挙げている、その李約を指すのであろうが、

広くは陸羽等の先人も含むのであろう。一方、煎茶の伝統が西蜀つまり蘇軾の出身地に伝わっていることも、この句からわかる。故郷の煎茶の伝統を継ぐということは、蘇軾の詩に、より強く表現されている。

さらに、詩の末尾を見ると、「且学公家作者飲、埴爐石銚行相隨。不用撐腸拄腹文字五千卷、但願一甌常及睡足日高時」と述べている。ここに「石銚」の語が見えるが、銚は、唐代の煎茶の詩においては、釜と同義的に用いられる言葉で、煎茶の道具であり、点茶には必要のないものである。「埴」と「石」が「銀瓶」の銀と対比させられていることも明らかであり、華美な点茶文化に背を向け、質素な煎茶を楽しむ意を述べた詩ということが出来る。「五千卷」云々は、盧仝の「走筆謝孟諫議寄新茶」の詩を意識した表現で、盧仝先生のように腹に五千巻の学識がつまっているから茶を飲むわけではないが、やはり盧仝先生にならって、日が高くなって起きてきてから茶の一杯も楽しみたいものだ、という程度の意味であろう。要するに、生活の中で、心から楽しむのは煎茶であると述べているのである。

蘇軾の詩を直接に補うのが、蘇轍の「和子瞻煎茶」である。これは、別人の詩とはいえ、兄弟のものであり、茶に対する考えには、共通している面が多い。冒頭近くの「煎茶旧法出西蜀、水声火候独能諳。相伝煎茶只煎水、茶性仍存偏有味」は、蘇轍自身が、蜀に伝わる伝統的な煎茶法を知っており、その口訣を覚えていることを明言している。「水声火候」は、恐らく蟹眼とか松風とかいった、水と火の加減を示す教えのことを指す。そして、煎茶の長所について、茶の本性が消えずに、とりわけ味わい深いと言いい、次に述べる南方と北方の飲茶法に比べて、蜀の煎茶法こそが茶の味を真に引き出す飲み方であると宣言しているのである。

次の「君不見、閩中茶品天下高、傾身事茶不知勞」は、茶のために費えを惜まない福建の団茶嗜好を指し、「又不

見、北方俚人若飲無不有、塩酪椒薑誇満口」と言うのは、北方の飲茶の際、様々な調味料を投じて喜んでゐることを指す。⁽²²⁾ともに、真の茶とは異なるものであると言うのである。

さらに、「我今倦遊思故郷、不学南方与北方。銅鑪得火蚯蚓叫、匙脚旋轉秋螢光」と述べているのが、彼自身の煎茶である。南方（福建）とも北方とも違う、故郷の蜀の煎茶を詠み、火にかけた「鑪」が、みみずの鳴き声をあげ、そこにかかった湯に茶末を投じて匙でかきまぜると、秋の螢のようにちらちらと光が見える、という内容である。

「鑪」は、やはり唐の茶詩においては、釜と同義に用いられる語であるし、⁽²³⁾「匙」は、『茶経』に言う竹筴と同じで、湯の中心をかきまぜる道具であろう。⁽²⁴⁾（これを点茶の詩と解すれば、『茶録』の「匙」ということになるが、それは前後の關係から不自然であると思う。）

「秋螢光」という表現は、他に類例が少なく、推測によるしかないが、宋の点茶で、茶の色を乳白色系に表現しているのに比べれば、唐の煎茶の詩に頻見する「麴塵」⁽²⁵⁾という茶湯の花の形容の方に、より近いと考えられる。共に黄色い光がきらめく様子と理解しうるからである。

ところで、蘇軾に話を戻すが、彼にはもう一首、福建の茶文化を批判的に扱った詩がある。「和蔣夔寄茶」は、自らが若い頃の点茶趣味を捨て去ったことを述べたもので、「柘羅銅碾棄不用、脂麻白土須益研」という句にそれが集約されている。点茶の道具である碾や羅はもう用いず、瓦盆の中で茶と胡麻と白土とを一緒に煮ると煮るのである。さらに後文に、「老妻稚子不知愛、一半已入薑塩煎」と言い、せっかくの高級茶の価値が妻子にはわからず、大半を生姜と塩で味つけて煮てしまった、という。妻子が煮たと言ってはいるが、作者自身、こういった素樸な茶にひかれているのであり、「脂麻白土」の茶とは同一のものなのかもしれない。

一方、蘇軾自身、若い頃は点茶の通人であったということをも、「故人独作旧眼看、謂我好尚如当年。沙谿北苑強分別、水脚一線爭誰先」の句に言い表わしている。要するに、若い時の蘇軾は、自他ともに認める品茶の能力者で、团茶の産地（沙谿と北苑）を、水脚を見ること⁽²⁶⁾で区別したというのである。

蘇軾の煎茶の詩をもう一首挙げると「汲江煎茶」があり、ここでも「活火仍須活火烹」と煎茶の要点を述べている。この詩で、茶を煮た様子を「茶雨已翻煎𦉰脚、松風忽作瀉時声」と描いているが、これは難解である。次章に雲脚を論ずる時に再びふれるが、釜の中に茶末が溶けて沈む様子を雨になぞらえたものであろうか。下句も、「瀉」という語は、点茶で湯を注ぐ所を感じさせるが、そんな場面の音を詠んだ詩は考えられない。やはり、釜の中の湯で松風の音を発し、すぐに茶を煮て汲み出したことを言うのであろう。

その他、蘇軾の茶詩は多岐にわたっており、团茶や点茶を扱ったものもあり、個々の表現では、次章に譲りたい。その中で「和錢安道寄惠建茶」は、特に詳しく团茶を描き、团茶の長所を「骨清肉膩和且正」ととらえ、それに比べると草茶は軽薄で価値が低く「奴隸日注臣双井」であるとする。草茶を团茶より低くみるのは、歐陽修と同じであるが、この詩全体は、茶の品評になぞらえて人物評を行なっているようでもあり、理解しにくい。

4、黄庭堅の茶詩

黄庭堅（一〇四五—一一〇五）の時代も、基本的には、福建茶の隆盛期であるし、それを詠んだ詩も多い。ただ、彼の詩が、その枠からはずれているとすれば、一つは、彼の故郷で双井茶を産していた関係からか、草茶に親しんでいたことであり、一つは、蘇軾との関係からか、煎茶に関わる詩を作っていることである。

第一に、団茶を詠んだ詩は、友人親戚との贈答の形をとっていることが多い。「以団茶洮州緑石研贈無咎文潛」「謝送碾賜壑源揀芽」「以小団龍及半挺贈無咎并詩」「戲答歐陽誠發奉議謝余送茶歌」「謝公扨舅分賜茶三首」などがそれに属す。これらの詩では、申し合わせたように「蒼龍壁」「蒼壁」の語が使われており、外形については多少の記述があるものの、点茶の描写は稀薄である。

ただ、興味深いのは「謝劉景文送団茶」の詩であり、劉季孫から団茶を送られた返礼であるが、「劉侯惠我大玄壁、自裁半壁煮瓊糜」という表現があり、諧謔味を帯びているのだとしても、「煮瓊糜」は、点茶の趣きを伝えない言い方である。もっとも、乳白色状の茶湯を表わしているには違いない。より問題なのは、最後の二句であり、「个中渴羌飲湯餅、鷄蘇胡麻煮同喫」を文字通り理解すれば、酒食に飽いた後に、鷄蘇と胡麻を入れて煮て飲むと言うのである。胡麻と言うのは蘇軾の「和蔣夔寄茶」を意識したものかもしれないので、そのまま受け取る必要のない表現かもしれないが、団茶をことさらに貴重視していないことを窺わせる。

もう一つ、異色な作品は、「五字頌」と題され、「嘗有老僧、暴背於後架作此五字示之、問会麼云不会、因以為頌」という序文がある。ある老僧から「五」の字を示されてその意を質問されたので、答えとして頌を作ったというが、禅僧と茶との関わりは、唐以来のことである。黄庭堅の頌は「齋余睡兀兀、占尽簷前日、不与一甌茶、眼前黒如漆」であり、茶の一杯も飲まねば、食後の眠気に耐えられない、という内容であった。ところでこの「五」という絵文字は、茶碗か茶托、それも我が国で天目台と呼ぶ種類の、建盞を載せる茶托である。この形が茶を示すことが、當時の人々には一目瞭然であったのであろう。

次に、草茶、特に双井茶と黄庭堅の関わりについて見よう。南宋の葉夢得の『避暑録話』には、「双井在分寧県、其

地属黄氏魯直家也。天祐間、魯直力推賞於京師、族人交致之、然歲僅得一二斤爾」と記されている。歐陽修の『帰田録』に従えば、双井茶の流行は、景祐年間（一〇三〇—一〇三五）以降のことであり、元祐（一〇八六—一〇九四）に比べると相当早い。年に一二斤しか採れないというのも異常に少ないが、本物の双井茶が少なかったということなのであろうか。

黄庭堅自身の書いた双井茶の詩として「双井茶送子瞻」と「以双井茶送孔常父」の二首が挙げられる。前者は、蘇軾に双井茶を贈るについて「我家江南摘雲搜、落磴霏霏雪不如」と言う。葉茶である双井茶を、磨でひくと雪のように白い粉となるというのであるが、これは団茶を末茶にひく時の描写と変らない。黄庭堅が双井茶を煎茶で飲んでいるか否かは、この詩からは不明である。

最後に、煎茶に関する詩を検討しよう。「省中烹茶懷子瞻用前韻」の「閨門井不落第二、竟陵谷廉定誤書」は、宮中の井戸の水も恵山泉や廬山康王谷の谷簾泉に劣るものではない。そう書いたのは竟陵子陸羽の誤記である⁽²⁸⁾、という内容で、蘇軾の「試院煎茶」の「銀瓶瀉湯誇第二」の内容を発展させたものであろう。だとすると、この煎茶の詩も、点茶の贅沢を批判した蘇軾の精神を受け継いでいるものといえよう。

この詩は統いて「思公煮茗共湯鼎、蚯蚓斂生魚眼珠」と言い、蘇軾の煎茶の様子を思い出しながら、自ら茶を煮ていることを述べる。ここでは、「湯鼎」つまり煎を煮る釜や「魚眼」「蚯蚓斂」（蘇軾の「和子瞻煎茶」の「銅鑪得火蚯蚓叫」を用いたもの）といった湯の加減を示す表現が現われ、完全な煎茶の詩である。

もう一つ「謝黄從善司業寄恵山泉」も、恐らく煎茶を詠んだもので、「急呼烹鼎供茗事、晴江急雨看跳珠」は、釜で茶を煮ている様子と思われる。下句の意味は特にわかりにくいが、「跳珠」が『茶経』「五之煮」の「縁刃如湧泉

連珠為二沸」に基づくのであれば、湯が沸いている形容である。「晴江急雨」も、湯の表面が急に泡立ったという描写なのであろうか。

5、楊万里の茶詩

楊万里（一一二七—一二〇六）および次に述べる陸游の茶詩は、概ね、南宋期の茶文化を代表するものと言ってよいであろう。南宋に至っても、北宋に隆盛を誇った福建団茶点茶文化が急速に衰えるわけではない。しかし、団茶に対する草茶（葉茶）、点茶法に対する煎茶法の相対的な重みが増してくるのではないかと筆者は考えており、その点については、次章でも論じたいと思う。

実際、北宋の四家の茶詩を検討してわかったように、北宋期においては、団茶点茶の優位を常識的なこととして扱う風があり、草茶や煎茶を取り上げる場合もあるが、それは特殊なものとしてであることが多い。南宋期には、その点はどうであるかを中心に見ていきたい。

楊万里の場合、煎茶の重みが増していることが、まず明白である。「澹菴坐上觀頭上人分茶」の冒頭は「分茶何似煎茶好、煎茶不似分茶巧」であり、「分茶」と「煎茶」を対等の存在と見ているようである。「分茶」については、次章でも述べるが、点茶法を用いて茶をふるまうことには違いなく、この詩に描かれているのは、その特殊な場合で、茶湯の表面に文字などを幻出させる技術を指す。だから「巧」と言われているのである。

したがって、「分茶」は、いずれにせよ点茶であり、それに対して、「煎茶」の方が「好」であると、端的に言い切っているのは、茶詩の流れの中では画期的なことと言えよう。ところで、この「好」の中味については、この詩だ

けからはわからないが、茶の味が良いというだけでなく、自らの趣味に合って好ましいという意味を含むのではなからうか。

そこで、楊万里の煎茶の詩を検討すると、双井茶や日注茶といった、当時の代表的な草茶と関連して、煎茶が描かれていることがわかる。まず双井茶については、「以六一泉煮双井茶」の詩がある。この詩は、双井茶を飲んで黄庭堅をしのんでいる詩である。「鷹爪新茶蟹眼湯、松風鳴雪兔毫霜」は、釜で茶を煮ている描写であり、末句の「何時歸土滕王閣、自看風爐自煮嘗」と呼応して、一貫した煎茶の詩となっている。そして、この詩が何より重要なのは、草茶である双井茶を、恐らく粉にひいて、煎茶、つまり釜で煮て飲んでいると明確に述べている詩の少ない例だからである。次章でも述べるが、草茶（葉茶）が宋代で飲まれた方法は、点茶法、煎茶法ともに存在したようであるが、その時代的变化は、まだ明確にはできない。ただ、筆者は、仮説として、草茶を煎茶法で飲むことが一般化したのは、時代的に遅れる、つまり南宋あたりのことではないかと考えている。⁽²⁹⁾ 楊万里のこの詩は、その証拠の一つである。

楊万里は、日注茶についても、「謝岳大提举郎中寄茶果藥物三首」の第一「日鑄茶」で、「松梢鼓吹湯翻鼎、甌面雲煙乳作花」として、釜の湯の様子と碗中の茶を対に詠み、煎茶法を用いていることを明らかにしている。

さらに、草茶との関連でいえば、楊万里は、上述の『避暑録話』において、つまり南宋期において、双井茶と並ぶ草茶とされた顧渚茶にも関係していた様子がある。「寄中洲茶与尤延之、延之有詩、再寄黄檗茶、仍和其韻」という詩を作っていることから見ると、彼は友人に中洲茶と黄檗茶という茶を贈っているらしく、前者はどういう茶か不明だが、後者は、陸羽が住んでいたといわれる湖州の杼山あたりの茶であろう。⁽³⁰⁾ その詩の中に「与君顧渚敢連衡」の句

があるので、その友人から顧渚茶を贈られた可能性も考えられる。顧渚茶は太湖沿岸の長興県産の茶であるから、この詩に出てくる茶も太湖近くの草茶なのであろう。

楊万里が、太湖周辺の草茶に親しんでいたとすれば、同じ場所で活動していた煎茶の祖である陸羽を、彼が尊敬していたことも偶然ではないだろう。一般的に言って、宋代において、陸羽は必ずしも高く評価されるばかりではない。むしろ、北宋の団茶末茶文化の最盛期には、貶しめられる傾向すらある。⁽³¹⁾ところが楊万里は、「題陸子泉上祠堂」の詩を作り、「万歳千秋名不朽」と、陸羽を賛え、無錫の恵山泉（陸子泉）に祠られ、僧侶たちに「茶仙」として崇められる陸羽の姿を詠んでいる。

楊万里が煎茶を重んじたとすれば、一つには、黄庭堅、さらには蘇軾に共感を持ったからであり、一つには、（福建の団茶でなく）江南の草茶を評価する先駆者であり、⁽³²⁾煎茶の完成者である陸羽への尊崇も見逃せない要素ではなからうか。

なお、楊万里には、当然、点茶を詠んだ詩もある。「謝福建提举庠仲宝送新茶」で「分嘗一点建溪春」と言うのは、建茶を点茶で飲んでいたのであるし、「謝木輜之舍人分送講筵賜茶」でも「北苑龍芽内様新、銅甌銀範鑄瓊塵、九天宝月霏五雲、玉龍双舞黄金鱗」といった具合に、詳細に団茶を描写して賞賛しているが、大げさな表現が目立ち、戯作に近い。また、「陳蹇叔郎中出閩漕別送新茶李聖俞郎中出手分似」の詩は、点茶（分茶）の様子を詠みこんでいる。

6、陸游の茶詩

陸游（一一二五—一一二〇）は相当数の茶詩を残しているが、九千首以上といわれる彼の全詩作から見れば、そう大きい割合でもない。しかし、彼は、多くの名茶に親しんでおり、茶の趣味も深く、生活に溶けこんだ茶を詠んでいる点では宋代随一といえよう。

陸游も、時代を反映して、煎茶の詩と点茶の詩を共に残しているが、前者に重点が置かれているように思われる。そして、楊万里の場合と似て、煎茶法で草茶を味わう傾向があるようにも感じられる。

その例を挙げると、「過武連鼎北柳池安国院、煎泉試日鑄顧渚茶、院有二泉皆甘寒、伝云唐僖宗幸蜀在道不豫、至此飲泉而愈、賜名報国靈泉云、三首」の連作は、四川の武連県に在った名泉で、携えていた日鑄茶と顧渚茶を煮たという内容で、第三首は「我是江南桑苧家汲泉闲品故園茶」と述べ、桑苧翁と号した陸羽と、自分の姓を結びつけ、桑苧家と称し、故郷の紹興に産した日鑄茶を味わうと述べる。後述するように、陸游は唐の陸羽さらには陸龜蒙といった茶人との縁を強調することがあり、自らの茶の趣味、特に煎茶の嗜好のよりどころを、唐の煎茶文化に求めているのではないかと想像させる。

この点は、「同何元立蔡肩吾至東丁院汲泉煮茶二首」も同様で、自らを陸羽になぞらえ、「身是江南老桑苧、諸君小住共茶杯」（第一首）と述べ、「雪芽近于峨嵋得、不減紅囊顧渚春」（第二首）と語りように、峨嵋山の雪芽茶を煎茶で飲んでいる。雪芽茶というのが草茶（葉茶）であるか否かは、嚴密には不明だが、下句で顧渚茶に劣らないと言っていることから想像すると、同類の葉茶であろう。

さらに、陸游の煎茶について、注目すべきなのは、その方法に工夫を加えている様子を示す詩が存在することである。「北岩採茶用忘懷録中法煎飲、欣然忘病之未去也」という詩は、題名から見ると、『忘懷録』という書物（未詳）に記された方法に随って、自ら採製した茶を煎茶法で飲んでいたのである。これに似た例が、「效蜀人煎茶戲作長句」であり、戯作であるとはいえ、蜀人の煎茶法にならって自ら茶を煮ているという内容には違いはない。もっとも、「紅絲小磑破旗槍」⁽³⁴⁾、「一試風爐蟹眼湯」といった表現は、葉茶をひいて煎茶法で飲むという型式を示すのみで、蜀の独自性があるわけではない。なお、末句に「誰賞蒙山紫箬香」と言う所から見ると、ここで用いているのは蒙山茶である。

その他、煎茶の詩としては、「雪后煎茶」が雪溶け水にあふれた井泉を用いて茶を煮る情景を詠み、「北窗」が、息子の送ってくれた恵山泉で、丁坑茶（陸游の自注によれば、日鑄茶の「流亞」であるというので、葉茶であろう）を自ら煎じたと詠む。ところで、陸游の煎茶の詩の中には、「午坐戲書」に「煎茶橄欖一甌香」とあり、「夏初湖村雜題」に「活火閑烹橄欖茶」とあるように、橄欖と共に煮た茶を愛好した様子を示す句が見られる。それも陸游の茶の一面なのであるが、名茶を名泉で煮る場合の煎茶とは別物と見なければならぬ。

上述したように、陸游は自らを陸羽に結びつけることを、煎茶や草茶の嗜好、もしくは単に清雅な生活を愛する拠り所としているように思われる。例をつけ加えると、「八十三吟」で、清貧な暮らしぶりを述べ、「桑苧家風君勿笑、他年猶得作茶神」と言い、「戲書燕几」の中では「水晶茶經常在手、前生疑是竟陵翁」と述べ、自分の前世は竟陵の陸羽でなかったかと言っている。その他、「開東園路北至山脚因治路傍隙地雜植花草」に「遙遙桑苧家風在、重補茶經又一篇」の句があり、「幽居即事九首」の第四に「臥石聽松風、蕭然老桑苧」の句もある。なお、「幽

居即事」の第五首には、「安得如吾宗、坐致願落園」と詠み、唐の陸龜蒙を「吾宗」と呼び、彼が願落山の下に茶園を持っていたことを羨んでいる⁽³⁵⁾。

陸游が唐の茶に親しみを持っていたとすれば、煎茶に傾斜していたことも理解できるが、一方、福建団茶と点茶に關して詠んだ詩も、当然存在する。しかし、「喜得建茶」は、友人から贈られた団茶を喜んだものであるし、「試茶」の詩は、彼が建安に赴任した時に、土地の茶を詠んだものであるから、彼がことさら団茶を愛好した証拠とはならない。後者には「緑地毫氈雪花乳、不妨也道入閩來」の句があり、兎毫蓋の乳白の茶を味わって、福建に来たという実感がわいたと述べている。

ところで、陸游の時代に、既に良質の団茶が求めにくくなったことは、彼の『入蜀記』にも見える。鎮江の丹陽樓で点茶が行なわれた際、同坐した熊克（建寧の出身）の言葉を挙げ、最近の建茶には楮の芽を混入しているため、質が落ちたと語らせている⁽³⁶⁾。建茶の全てがそうであったのではないだろうが、相対的な価値の下落が、この時期には既に始まっていたことの証拠となるであろう。

以上述べて来たように、陸游は茶人と呼ぶにふさわしい詩人であるが、彼を特徴づけているのは、生活に密着した茶詩を多く残しているという点であろう。

彼の茶詩には、家庭で茶を味わう心境を題材にしたものも多く、「睡起試茶」では、蒙頂茶を味わう楽しみについて「但恨此味無人領」と結び、「飯罷碾茶戲書」は食後の茶、「啜茶示兒輩」は食後の団茶時の茶を詠んだものである。その「團坐團樂且勿嘩、飯余共舉此甌茶」の句には、家族と味わう茶の喜びが感じとられよう。

また一方、彼の茶詩には、老境、病中の生活を詠み、清雅であるが、わびしさを前面に出したものも目立つ。例え

ば、「九日試霧中僧所贈茶」は、蜀の霧中山で重陽の節日に詠まれたものだが、「少逢重九事豪華、南陌雕鞍擁鉦車。今日蜀州生白髮、瓦爐獨試霧中茶」と詠み、若き日の豪遊と、老いた現在、独りで茶を味わう様子を対比させている。

茶を煮る煙と白髮と老境または病、この三者を結びつける表現を、陸游は好んで用いている。「寄仲高（漁家傲）」の詞には「行遍天涯真老矣、愁無寐。鬢絲幾縷茶煙裏」の句があり、「初春懷成都」の末尾は「病來幾与翹生絕、禪榻茶煙雙鬢絲」であり、「病中久止酒有懷成都海棠之盛」の末尾は「説与故人應不信、茶煙禪榻鬢成絲」である、病のために酒（翹生）を絶たれ、茶と禪の生活の中で老いて行く身を詠んでいるのであるが、陸游の晩年が、茶と深く関っていたことを示す。その関わりの深さは、上に述べた他の五人の詩人には見られなかったものである。

Ⅲ 宋詩に見る茶の諸相

1、団茶に関して

この章では、上述した六人の詩およびその他の詩人の表現を材料として、宋の茶の形状・飲み方などの具体的様相を考へることとする。まず第一に、福建団茶（建茶）について検討する。

団茶の外形については、形状・色彩・光沢などの要素が考へられるが、それらを総合的に言い現わしている一種の比喩が、「璧」またはそれに類する形容であるといえよう。

団茶を壁になぞらえている例としては、歐陽修の「送龍茶与許道人」に「我有龍団古蒼壁」の句があり、上述した梅堯臣の「宋著作寄鳳茶」に「団為蒼玉壁、隱起双飛鳳」の句があった。これらを先例典型として、宋詩では、団茶を壁と言い換えるのが常套表現であったと思われる。特に多いのは、黃庭堅であり、彼の「以団茶洮州緑石研贈無咎文潜」に「越侯所貢蒼玉壁」、「謝送碾賜壑源揀芽」に「鬲雲從龍小蒼壁」、「以小団龍半挺贈無咎并詩用前韻為戲」に「我持玄圭与蒼壁」、「戲答歐陽誠發奉議謝余送茶歌」に「蒼龍壁、官焙香」、「謝公扨舅分賜茶三首」の第一に「外家新賜蒼龍壁」の句がある。

他の作家では、王安石の「寄茶与和甫」の「月団蒼潤紫煙浮」、張耒の「乞錢穆父給事文新賜龍団」の「閩侯貢壁琢蒼玉、中有掉尾寒潭龍」がこれに近い。

これらの詩句は、「隱起双飛鳳」「鬲雲從龍」「中有掉尾寒潭龍」というように、『北苑貢茶録』の図から窺い知る当時の茶の表面の模様を、具体的に描写しており、既述の蘇軾の「月兔茶」に見えた「双銜綬帶双飛鸞」と同様、実見しての作に違いない。

「蒼い壁」という表現が最も多く、典型的であるとはいえ、他の形容、例えば「玄圭」のようなものもある。これは、当時の団茶が、狭義の団茶、つまり円柱状（円盤状）のもの他に、「龍園勝雪」「貢新鎔」の如く正方形形のもの、「白茶」「蜀葵」「雲葉」の如く、多角の花形をしたものが作られていたからである。秦觀の詞「味茶（満庭芳）」に「北苑研膏、方圭円壁」とあるのは、その端的な表現である。「圭」は、一般的にいえば、必ずしも正方形でないし、「長寿玉圭」という茶は、『北苑貢茶録』の図を信ずれば、上円下方の長い形をしているが、概して宋の茶に關しては、「壁」が円形茶、「圭」が正方形の茶を指しているのではなからうか。

この点に関して言えば、「髹」もしくは「夸」という語にも注意しなければならない。「北苑別録」では、円形もしくは花形の茶を数えるには「片」、方形の茶には「鑄」と、量詞の使いわけがされている。詩に用いられる場合も同様であると思われる。

例えば、蘇軾の「和錢安道寄惠建茶」に「葵花玉髹不易致」とあるのは、「葵花」つまり「蜀葵」のような花形の茶と「玉髹」つまり方形茶と対比させていると考えると考えるとわかりやすい。この点では、沈遼の詩「徳相惠新茶復次前韻奉謝」の「帶髹体正方、葵華角仍壓」がより詳しく、参考になる。「帶髹」と記されていることから見ると、「髹」であれ、「夸」「髹」⁽³⁷⁾「鑄」であれ、帯の金具をもって、正方形の茶の呼称としてるのであろう。だとすると、僧惠洪の「將登南嶽絶頂而志上人以小团鬪夸見遺作詩謝之」に「壑源独歩宝帶夸、官焙無双小月团」とあるのも、方と円の並挙の例である。題の「鬪夸」は、鬪茶に使うような高級な方形茶の意か。

この他に、花形の茶と团茶を並べた例もあり、晁補之の「次韻魯直謝李右丞送茶」がそれで、「月团清潤珍參羊、葵花瑣細胃与腸」と述べている。

しかしながら、話を戻すと、福建の固形茶は、多くの場合、玉器にたとえられているのも事実である。孫覲の「李茂嘉寄茶」に「蛮珍分到謫仙家、断壁残璋裹絳紗」とあるのは、諧謔味を帯びているが、茶を璧と璋と言い換えているものである。

したがって、「蒼璧」という表現から、実際の团茶が、光沢のある、固いものであったのではないかと想像される。これについては、以前、陳淵の頌「留龍居士試建茶既去輒分送并頌寄之」に「未下鈴鎚黒如漆、已入篩羅白如雪」の句があることを挙げて論じたことがある⁽³⁸⁾。上に引いた詩句にも、「潤」の語を用いている例があり、茶の表面が、き

め細くなめらかであったことを窺わせる。

光沢の問題は、色彩とあわせて考えるべきであろう。「蒼」の他に、団茶の色としては、上述の「玄」「黒」、歐陽修の「次韻再作」に「乍見紫面生光華」とある「紫」が用いられている。これらの色彩は、概していえば濃い色であり、「蒼璧」の「蒼」も、恐らく深い緑であったのだろう。

『茶録』では、団茶の色として、「餅茶多以珍膏油其面、故有青黄紫黒之異」というが、『品茶要録』によれば、沙溪の劣品の茶は、「体軽而色黄」であり、壑源の良品は「体堅而色紫」であるという。黄色の茶が一般に低く考えられていたのであれば、詩の中で用いられないことも肯げよう。ただ、その他の色については、論者によって違うのである。『大観茶論』では、茶の表面の色を製造の遅速によって、「青紫」「惨黒」と分け、さらに良い茶は、「縝密如蒼玉者」であると言う⁽³⁹⁾。これが宋詩一般の表現の裏づけとなる考え方に近いものである。 (南宋の莊季裕の『雞肋篇』では、官製の茶は、乾燥に数十日かけるため多く「紫」であり、民間の茶は「青黒」で好くないという。)

ところで、『茶録』の記事によれば、団茶の表面には「珍膏」を塗るとい⁽⁴⁰⁾う。茶の表面の色が、その膏によって変化したかどうかはわからないが、外面だけからは、茶の善し悪しは知り難いという考えが生まれたはずである。だからこそ、蔡襄も続けて「善別茶者、正如相工之隠人氣色也、隠然察之於内」と言っているのである。

詩人にも、この点に触れているらしく思われるものがあり、例を挙げると、蘇軾の「次韻曹輔寄壑源試焙新芽」に「要知冰雪心腸好、不是膏油直面新」と言い、晁補之の「魯直復以詩送茶云願君飲此勿飲酒次韻」に「相茶真似石韞璧、至精那可皮膚識」と言うのがそれである。

次に、団茶の製造に関して、詩句に見られる表現を検討したい。しかし、茶園を詠んだ詩は多いが、特に製造工程については、茶書の記述を補うようなものは少ない。これは以前に紹介したが、梅堯臣の「答建州沈屯田寄新茶」の「春芽碾白膏、夜火焙紫餅」は、『北苑別録』等の内容と重なるけれど、簡単に過ぎる。

最もこの点で詳細な宋詩は、上述の沈遼の「德相惠新茶復次前韻奉謝」であろう。その一部を記すと、北苑の製茶風景を述べ、「山下幾千家、以此為生業。新陽一日至、東風方獵獵。百草尚勾申、靈芽已先捷。所採僅毛髮、厥工巧烹變。甘泉列盎釜、熾炭浩旁疊。修竹為之規、黃金為之桼。形摹各臻妙、製作易妥帖。至尊所虛行、守臣方惕懾。其上為虬龍、蜿蜒奮鱗鬣。稍降乃交鳳、文翼相盤跼。」と詠む。

この中で、「採るところ僅かに毛髮」と言うのは、北苑で団茶を製造する際、茶の芽のごく一部だけを選んで用いたことを指すのであろう。『北苑別録』に「揀茶」の項があって、その事を論じているが、中でも「水芽」というのは、茶の芽を「置之水盆中、剔取其精英、僅如鍼少」という用いかたをするのである。この詩は、それを指しているのかもしれない。

また、団茶は、原料の芽を蒸し、研ってから、型にいれて形成するが、この詩では、その描写が詳しく、他に例を見ない。修竹と黄金の型に用いているような記述であるが、『北苑貢茶録』の図によれば、竹や銀や銅の「圈」(わく)と「模」(模様を彫った型)が使われたらしい。楊万里の詩「謝木輶之舍人分送講筵賜茶」に「北苑龍芽内様新、銅匣銀範鑄瓊塵」とある。沈遼が黄金というのは詩的表現に過ぎない。

ところで、この、茶を型に入れる作業は、特に技術を要したようで、『北苑別録』の「造茶」の項には、「匠者起好勝之心、彼此相誇」と記され、技術者どうしが腕を競いあったことがわかるし、この詩の「形摹各臻妙、製作易妥

帖」の句にもその様子が読みとれる。

最後に、団茶の包装について検討したい。この問題は、宋詩によく使われる「箬」に関することで、以前にも論じたことがあるが、⁽⁴³⁾ここでも述べておく必要がある。

上に述べたように、梅堯臣の詩に、贈られた茶が「每餅包青箬」つまり、一つずつ青い「箬」に包んであったとあり、「籜」つまり竹の皮に包んであったと思われる例もある。その他、梅堯臣の詩では「次韻和」に「建安大守置書角、青蕪包封来海涯」という句がある。

その他の詩人の句では、歐陽修の「嘗新茶呈聖俞」に「香蕪包裹封題斜」と言い、黃庭堅の「謝公扨舅分賜茶」の第三に「細題葉字包青箬」とある。(葉家が製造した茶であることを示す題箋が付してあるというのは、梅堯臣の詩について既に見たことと一致する。)また、韓駒の「謝人送鳳団及建茶」の第二に「細蕪勻排訝許方」とあり、(これは、杜甫の「野人送朱棧」に「万顆勻円訝許同」とあるのを用いたもの。)福建団茶は、一般に「箬」「蕪」「籜」と通ずる)つまり笹の葉の類に包まれていたことが明らかである。

なお、『北苑別録』には団茶を何枚かずつまとめたりえて、「圈以箬葉、束以紅縷」云々と規定されている。また、参考として、梅堯臣の「晏成統太祝遣双井茶五品茶具四枚近詩六十篇因以為謝」が挙げられる。これは、福建団茶ではなく、双井茶についての記述であり、後に詳論するように、双井茶は葉茶であるが、「青蕪出篋封題加」と表現されている。袋詰めの双井茶を青蕪に包んで箱に入れて送ったのであろう。

2、点茶に関して

福建団茶が点茶法と呼ぶべき飲み方で飲まれたことは問題がなく、中国の飲茶の歴史の上で、点茶法が持つ意味についても、以前に論じたとおりである。点茶法については、宋の茶書の記述が多く、その輪郭をつかむことができ。この節では、詩の表現を補足資料に用いて、宋の点茶の具体的な面を明らかにしようとした。

団茶を点茶で飲む手続きについて、『茶録』と『大観茶論』の間に、匙を用いるか筥を用いるかの差はあるものの、それほどの違いはない。団茶を砕いて粉にすること、湯を湯瓶で沸かすこと、盞に入れた茶末に湯を注いでかきまぜることの三点を骨子とする。最も茶の描写や品評に関して細かな問題が多いのは第三の点であるが、その前の二つの手続きについて、まず論じよう。

唐代の飲茶法は煎茶を中心とするが、その際も、固形茶を粉末にする過程が必要であった。その際、碾や羅が用いられたが、宋代には碾のみでなく磨(臼)も使われた。ただ、これは本質的な違いでなく、詩の表現に影響はない。⁽⁴⁾宋代独自の点があるとすると、二つ考えられ、第一は、団茶を砕くための金槌の類が用いられたこと、第二は、砕かれた粉にされた茶末の色彩が、白色と表現される傾向があることである。

まず金槌であるが、『茶録』では、団茶は「以鈴箒之、微火炙乾、然後碎碾」という。つまり鈴という道具ではさんで、弱火で炙り、それから砕くのである。元の資料であるが、『王禎農書』によれば、「以紙裏槌碎」とある。前節で挙げた陳淵の句に「未下鈴錘」と言うのは、団茶を砕く道具として「鈴錘」が用いられることであり、金偏がついている所を見ると金槌なのであろう。宋の団茶が墨のように固かったことを暗示している。

金槌で茶を砕く場面はめったに詩に詠まれることがないが、碾や磨で茶末にひくところは、多く描かれている。その際、茶末が白色であると表現されることがほとんどであり、上述の陳淵の句も「白如雪」と言っていた。

これに関する例を挙げると、梅堯臣の「呂晋叔著作遺新茶」には「屑之雲雪輕」の句があり、「次韻和」には「晴明開軒碾雪末」の句がある。また、韓駒の上述の詩に「密羅深碾看飛霜」と言い、劉子翬の「答卓民表送茶」に「攪雲飛雪一番新」と言う。最後の例は、茶末の形容か茶湯の形容か判然としないが、その他は、明らかに建茶を粉にした時の描写である。

雪や霜が白くて微細な粉を指すことは言うまでもないが、茶末の白いものを上等とするのは、宋の茶書一般に見られる考え方である。ただ、茶書においては、茶末が湯と混り合った色を論ずることが多いので、これについては、後の茶湯の部分で述べる。

茶書ではないが、王鞏の『聞見近録』には、宮中で末茶が下賜されたことを述べ、「夜賜碾成末茶、二府両指許二小黃袋、其白如玉、上題曰揀芽」と記す。団茶を末にしたものを、袋に入れて賜ったのであるから「白如玉」というのは、茶末の形容であろう。

そもそも何故に団茶の粉の色が白いかについては、以前、推論を述べたことがあるので省略するが、『北苑別録』に見られるような、異常ともいえる製茶法に由来するものと考えざるをえない。宋代の人間が茶末の白さを自覚していた点については、後述する。

次に点茶法における第二の手続きである湯を沸かすことについて検討しよう。唐の煎茶においては、湯を沸かす釜にふたがないため、水面を見ながら沸き加減を知ることができ、だからこそ『茶経』に「如魚目」とか「縁辺如湧泉

連珠」といった表現が見られるのであろう。それに比べて宋の点茶では、ふたのある湯瓶で湯を沸かすため、『茶録』の主張するように、「候湯最難」という結果になる。同書で「沉瓶中煮之不可辯」というのはその意味である。『茶録』では詳述していないが、結果として、点茶法で湯加減を知るためには、耳に頼ることになるであろう。その最も精密な議論は、南宋の『鶴林玉露』に見える。⁽⁴⁶⁾

しかし、概して点茶を表現した詩文は、煎茶の場合に比べ、湯を沸かすことにそれほど重点を置いていないように見える。点茶の湯瓶を詠んだ例としては、僧惠洪の「謝性之惠茶」に「午窓石碾花怨語、活火銀瓶暗浪翻」という句がある。「浪翻」は『茶経』の「騰波鼓浪」を意識したものかもしれないが、湯瓶の中なので「暗に」と言い、耳で感じた情景であることを示している。同じく「無学点茶乞詩」に「銀餅瑟瑟過風雨」とあるのも、湯の音を風雨になぞらえたものであろう。団茶より煎茶の場合にも、湯の音を描くことはあるが、点茶の際には、音しか描けないことになるのである。

さて、点茶の手続きの最後となる、蓋で茶を点てることについて論じよう。以前に論じたことであるが、茶末を蓋に入れて湯を注いでかき混ぜた状態について、極めて細かな品評の用語が存在したらしい。『茶録』によれば、茶末が少なく湯が多いと「雲脚」が散じ、湯が少なく茶末が多いと「粥面」が聚まると言い、茶の粒子と湯が適度に混りあい、しかも、いつまでも粒子が沈まないのが良いとされた。

梅堯臣の上述の詩「李仲求寄建溪洪井七品……」に見られた「無水量」「無沈袒」「散雲脚」「浮粟花」「若瓊乳」は、全て、こういった点茶の品評に関して理解されるべきであったし、他の詩についても同様の例は多い。特にこの中で、「雲脚」「粟花」「瓊乳」の三者は、宋の点茶を広く考える手がかりとなると思われるので、順次検討を加え

たい。

まず「雲脚」であるが、これは、青木正児氏の考察を経てにせよ、⁽⁴⁷⁾難解な語にとどまっている。手がかりとなるべき「茶録」の文章は簡単に過ぎるが、茶の粒子が湯の中に漂う様子を、雲のようだと表現したものであろうという見当はつく。

詩に用いられている例も、そう多いわけではないが、同じく梅堯臣の「謝人惠茶」に「以酪為奴名価重、将雲比脚味甘廻」の句がある。前の句が『茶経』に見える「酪奴」⁽⁴⁸⁾の故事をふまえているとすれば、後の句も、「雲脚」の語が、茶の用語として定着していることを前提としたものであろう。ただ、この詩は、団茶を詠んだものではあろうが、確定はできない。

他の詩人としては、僧惠洪の「謝性之惠茶」に「射眼色随雲脚乱、上眉甘作乳色繁」とある。ここでは「雲脚」と「乳花」が茶湯の表現になっている。これも団茶と明記されてはいないが、上文に「活火銀瓶暗浪翻」の句があることからすると点茶の詩である。「雲脚」が乱れるという表現は、「乳花」が繁である、の対であるから、特に悪い意味、「茶録」の「雲脚散ず」のような意味でなく、単に茶末が雲のように湧きたたよう様子を示したものであろう。その点、梅堯臣の詩に言う「五品散雲脚」と同じであると思われる。

ところが、未だ「雲脚」の用例を他に見出せないのも、関連する表現と併せて考えて行きたい。もっとも、王令の「謝張和仲惠宝雲茶」に「烹来似带呉雲脚、摘處應無穀雨痕」という句があるが、これは呉の茶であるから、福建団茶ではなく、従ってその淹れ方も確定できず、資料にはなりにくい。詩意から考えると、上の句は、茶を煮ると、(あるいは点でると)産地の呉の雲を思わせるような雲脚が生じる、下の句は、この茶を摘んだその時は、穀雨よ

り早い時期だったから、その雨の痕もなかったであろう、ということであろうか。「雲脚」と「水痕」という茶の用語をかけて用いているのかもしれない。

「雲脚」に似た表現として、まず詩以外の資料を見ると、『太平寰宇記』に引く毛文錫（五代十国の蜀の人）の『茶譜』に、袁州の界橋という茶について「烹之有綠脚垂下」という。王令の詩を思わせるような表現であるが、その茶を、たぶん粉にして煮ると湯の中に緑色の雲のようなものが垂れ下って行くことなのであろう。これは、宋の点茶文化に比べると異質の感じを免れないが、「雲脚」の語の起源の一つと見てよいであろう。

また、黄儒の『品茶要録』は、純然たる点茶の書だが、「試時色非鮮白、水脚微紅者、過時之病也」とある。製造の時期が遅れすぎた場合、点てた色が鮮白でなく、水脚が紅をおびるというのであるから、この「水脚」は「雲脚」と似た意味なのであろう。ところが、『大観茶論』の「点」の項には、「雲霧雖泛、水脚易生」とあり、これもよくわからないが、『茶録』の「水痕」と同じような意味で「水脚」と言っているように思われる。⁽⁴⁹⁾しかし、いずれにせよ、これらの「脚」のつく表現は、茶の湯の水面下の状態を表現しているという点は共通している。

次に、詩の中で「雲脚」に似た語を探すと、蘇軾の「和錢安道寄惠建茶」に「骨清肉膩和且正、雪花兩脚何足道」とあるのは上述した通りである。ここでは、団茶の外形を「骨清肉膩」と形容し、それを点てた時の、一般に美しいと評価されるであろうものを「雪花兩脚」と言い、道うに足らずと決めつけているのである。「雪花」というのは、恐らく、茶末を雪と表現しているのではなくて、『茶經』の煎茶法で、表面に浮くものを花と呼ぶ、その花であろう。ただ、点茶法の場合、「花」という語が用いられるのは例外に属し、特に茶書ではそうである。宋詩で「花」の語が使われる例は、氣付いた範囲で挙げておくが、唐の茶の表現を模したものに過ぎず、宋の茶とは異資のものでは

ないかと思う。話がそれだが、「雨脚」について言えば、正確にはわからないものの、「雲脚」と似た意味で、表面の「雪花」に対して用いられているのではなからうか。

実は、蘇軾の「汲江煎茶」の詩にも「茶雨已翻煎處脚、松風忽作瀉時声」の句があり、上の句は、読み方によっては、「雨脚」の語を言い換えたものとも見られる。もっとも、これは煎茶の詩であるが、上述の「緑脚」の例もあり、茶末を釜で煮る場合でも、それが湯の中に広がったものは「脚」と称するとも考えられる。「茶雨」という表現は不自然であるが、「松風」と対にするために、こう言ったのであろう。結局、この句の意は、茶末を沸いた湯に投じたところ、早くも雨のように広がり沈んでいった、ということにならうか。

もう一つの例は、釈惠洪の「郭祐之太尉試新龍团索詩」に「春霧脚縈雪花湧」とある表現である。これは強いていえば「霧脚」ということであらうが、「縈」の文字によって、その語感がよく理解できる。やはり、茶粒子が、霧のようにわき立っていることを表現しているのであろう。

以上見てきたように、「雲脚」「雨脚」「霧脚」などという表現は、基本的に、茶末が湯中で漂う様子を、白い雲や霧になぞらえたもので、宋の点茶法の特徴をよく示すと同時に、茶の湯の色の白さとも関わりを持ってこよう。ただ、白さを強調した表現としては、「乳白」系統の語があるので、そこで論じたい。

「雲脚」の次に、「粟花」について論じたい。一般に、「脚」が湯の水面下の状態を指す語だとすると、茶湯の「面」を表現する語もあるはずである。ただし、点茶法では、煎茶の際に花を強調するのと違い、表面に、はでな何かが浮ぶことは良くないとされたのではないかと思われる。『茶録』で、茶末が多い場合「粥面」が聚まるというのは、湯の表面に何か浮びすぎて、しわができたり固まることのように感じられるし、逆に、『大観茶論』に、茶末を

二度ふるいにかけてた場合、「入湯軽泛、粥面光凝、尽茶之色」というのは、表面に余計な模様などができず、平らに光っていることと思われる。

表面の形容として、茶書では「粟花」の語は見えないが、「粟紋」という表現があり、当然同じものであろう。『東溪試茶録』に、壑源の茶のあれこれを論じた中に、「及受水則淳淳光沢、（原注、民間謂之冷粥面）視其面渙散如粟」とあり、また「無粥面粟紋而頗明爽」という表現もある。また、『品茶要録』に、まぜものをした茶について、「試時無粟紋甘香」と言い、蒸しすぎた茶について「試時色黃而粟紋大」と言う。

要するに「粟紋」とは、茶湯の表面に現われる細かな粒状の模様を言うのであろうが、その有無大小によって、茶の良否を見わけるので、有れば良いとか悪いとかいうものでもないらしい。

この「粟紋」にあたる表現は、梅堯臣の上述の詩の他には、同じく「金山芷芝二僧攜茗見訪」に「北焙花如粟」とあり、「建溪新茗」に「粟粒烹甌起」とあり、「次韻和」に「粟粒鋪面人驚嗟」とある。梅堯臣は、このように、建茶の特徴として、「粟粒」「粟花」の語をよく使っているが、他の詩人の用例は少ないように思われる。

「粟紋」は、茶書の記述による限り、福建茶全ての特徴でもないし、恐らく品茶の専門家が見わけるような微妙なものだったのであろう。「粟粒鋪面人驚嗟」というようなこと、つまり、人々が点てられた茶面の模様を見て賛嘆するということは、後述する「分茶」のような特別な場合にはあったであろうが、点茶の一般的な姿ではないだろう。もしそうなら、他の詩人も、言葉を費して、茶湯の表面の描写をしているはずだからである。

さらに「瓊乳」また、それに類する、茶湯を乳白色として表現する場合について検討しよう。一連の宋の茶書では、茶を点てた色について、白を基準として議論している。最も典型的なのは『大観茶論』で、「色」の項に「点茶

之色、以純白為上真、青白為次、灰白次之、黃白又次之、」と言う。要するに、何らかの色彩を帯びている場合でも、白が基調なのである。

この白色も端的に乳白色と言う茶書は少ない。しかし、『茶録』の「茶盞」の項に「茶色白、宜黒盞」とあるのは、黒い色の茶碗を用いた方が、白い色が引きたつということであるから、茶の白い粒子が浮いている色を白というのであり、茶の表面が白ということでもないだろう。先に述べた「雲脚」等が、この茶の特徴だとすると、全体に透明感のある茶であったはずである。

いずれにせよ、詩の表現には、「乳」の字が用いられる。梅堯臣には、「瓊乳」の他、上述の「宋著作寄鳳茶」の「色薄牛馬漣」なる表現もある。同じく「王仲儀鬪茶」の「白乳葉家春」もこの類である。

「瓊乳」に最も近いのは秦觀の「味茶（滿庭芳）」に「香生玉乳、雪濺紫甌円」とある「玉乳」であろう。「乳花」という語も用いられ、歐陽修の「嘗新茶呈聖俞」に「停匙側盞試水路、拭目向空看乳花」の句があり、蘇軾の「送南屏謙師」に「天台乳花世不見」とある。また、上に述べた僧惠洪の「謝性之惠茶」においては、「雲脚」と「乳花」が対に使われていた。

歐陽修の言う「側盞」や「拭目向空」は、茶の粒子の溶けぐあいをよく観察するための動作で、後述するように、点茶にはつきものである。したがって、「乳花」というのも、「花」には違いないが、唐の煎茶の「花」より、微妙な、目をこらさなければ見極められない存在に思われる。それを「乳」と表現するのは、乳白色であるからだろう。なお、僧惠洪は、「与客啜茶戲成」で「津津白乳衝眉上」の表現を用いているが、点茶を述べたものかどうか判別できな

乳白色、そして恐らく薄い乳白色であったと思われる茶湯を、楊万里が、「陳蹇叔郎中出閩漕……」の詩で「打成寒食杏花餠」と、とろみを感じさせよう表現していたことも、注目される。

これら乳白系統の表現と、「雲脚」の語感から、宋の点茶における茶湯の色彩を想像することは難しくないであろう。製法上、色彩を薄く作られ、微細な粉にひかれた茶末が、湯と混りあって、「品茶要録」に「凡試時泛色鮮白、隠於薄霧者、得於佳時而然」とされるようなものが、良品の証であったのである。

したがって、既に常識に属することであるが、唐の茶が緑色や黄色系統の語で表現されるのに対し、宋の茶が白色であることは、大きな変化である。違いは、製法上の進歩もあるので、単に文学的表現の差でなく、実物の茶の色が異なっていたと考えるべきである。この点については、宋代の人々自身が論じているものが参考になるだろう。

その議論の中心となる詩は、范仲淹の「和章岷從事鬪茶歌」で、建茶の製造と鬪茶の様子を、あまり具体的にないが、長篇の詩に作っている。その中の「黄金碾畔緑塵飛、碧玉甌中翠濤起」という句が問題とされたのである。つまり、通常の宋詩の感覚では、茶、特に福建団茶の茶末は、白色であって「緑塵」であるはずはなく、茶湯も乳白色であって「翠濤」ではおかしいというのである。

これを指摘しているのは南宋の王観国の『学林』で、「沈存中論茶、謂黄金碾畔緑塵飛、碧玉甌中翠濤起、宜改緑為玉、改翠為素」という沈括の説を引き、その「緑塵」と「玉塵」に、「翠濤」を「素濤」に改めよという考えに対して、「此論可也」と賛成している。そしてあわせて、宋初の茶詩で、やはり茶を緑色に表現したものとして、鄭谷の「入坐半甌豔泛緑」、鄭雲叟の「惟憂碧粉散、嘗見緑花生」を挙げている。鄭雲叟（鄭遨）の詩などは、別に建茶を詠んだものでもなく、唐の煎茶詩の典型的な表現であるが、宋の人間から見ると、異和感を覚えたのであろうか。范仲

淹は、『茶録』が書かれ、宋の点茶文化が完成した時期より、早く活躍した人物であるから、宋初には、白い茶を貴ぶ共通理解がまだ成立していなかったためか、あるいは、茶の製造技術上、まだ精選された白い茶ができていなかったかのいずれかであろう。

王観国は、「茶之佳品、其色白、若碧緑者、乃常品也」と述べ、「茶之佳品、皆点啜之、其煎啜之者、皆常品也」と続け、白い茶を緑の茶より、点茶法を煎茶法より高級なものとして認めて、唐より宋の茶文化が進歩していることを証明しようとしている中で、詩の表現をとりあげているのである。点茶と煎茶の比較については、後述する。

さらに、王観国と同様の議論を、胡舜陟が『三山老人語録』の中で行っているが、大同小異である。下って袁戈の『甕牖間評』では、白居易の詩をとりあげ、「白樂天茶詩云、渴嘗一盞緑昌明、昌明乃地名……此正与黄金碾畔緑塵飛之句相似、蓋是時未知所以造茶、製作不精、故茶之色猶緑、而好事者録其茶之妙、亦未以白色為貴、其詩故如此、使樂天見今日之茶之美、而肯為是語耶」と論じている。

ただ、これらの議論は、北宋期の常識に基づいたもので、南宋に入り、団茶の貴重さが薄れてくるにつれ、別の考えも生じてきたようだ。陳鶴の『舊日統聞』には、蔡襄が范仲淹の詩を見て、緑を玉に、翠を素に改めるよう進言したという話を引き、蔡襄の説ももっともであるがとしたりうえで、「今自頭綱貢茶之外、次綱者味亦不甚長、不若正焙茶之真者已帶微緑為佳」と述べている。つまり、貢茶の最上等のものは別として、次の等級のものはそれほど味が良いわけではない、北苑産の本物の茶のうち、緑色がかつたものがよろしい、と主張している。文脈から見ると、頭綱や次綱の茶は、やはり白色であったように読めるが、それが尊重されなくなったのは、より自然な葉茶を煎茶で飲む方法、さらには泡茶へ移行して行く、大きな流れが関係しているものと思われる。

さて、次に点茶に関連して、茶の品評の問題をとりあげよう。すでに何度か触れたように、宋代の点茶は、闘茶を代名詞とするほど、茶の優劣を競うことに熱心であり、その基準も様々に考えられたが、中でも、「雲脚」「粥面」など、茶末と湯の混ざった様子を観察することが重視された。

『茶録』の「建安闘試、以水痕先者為負、耐久者為勝、故較勝負之説曰、相去一水兩水」なる文は、「水痕」を茶の粒子から分離した水が見えることとする筆者の理解が正しいかどうかは別としても、「一水兩水」という細かな差異を争った様子を記している。

その際、茶湯の様子を視るためには、『品茶要録』に、まぜ物の多寡を知る手だてとして、「善茶品者、側盞視之、所入之多寡、從可知也」と書かれたような動作が必要であった。「側盞」の語は、上述の歐陽修の詩にも見られたが、言葉から考えると、目の横に盞をもってきて、上からでなく、斜め横から水面の様子を観察することなのではなからうか。その際、黒地の盞が使われたからこそ、乳白色の茶を、よりよく見極めることができたので、だから『茶録』に「其青白盞、闘試家自不用」と言うのである。

この黒地の盞としては、建安産の兔毫盞が有名であり、蘇轍の「次韻李公扈以惠泉答章子厚新茶」に「兔毛傾看色尤宜」とあるのがそれである。ここでも「傾看」と言い、「側盞」と同様な行動をとっているようだ。

これに類する動作と思われるもので、僧惠洪の「無学点茶乞詩」の「盞深扣之看浮乳」の句が注目される。「扣之」というのは、盞をたたいて、浮いた泡などを消すか、一方によせるかするためであろうか。

次に、点茶に関する器具で、宋の茶詩に見えるものについて言及しておこう。団茶を砕くための「鈴錘」は、上述の陳淵の頌に見えるのが珍しい。「湯瓶」についても、既に一、二の例を挙げたが、これも目立つ主題とはなっていない。

ないようである。茶をかきまぜる道具も点茶に不可欠であるが、『茶録』では「匙」、『大観茶論』では「筥」の名が挙げられ、その両方が用いられたのであろうが、『茶録』では、竹の匙は、建安では用いないと明言しており、⁽⁵⁰⁾事実上、茶筥を否定している。

もし、匙から筥への移行が、時代の変化を表わしているとすると、歐陽修の上述の詩「停匙側盞試水路」が『茶録』の時代にあたり、僧惠洪の「空印以新茶見餉」に「要看雪乳急停筥」が『大観茶論』の時代にあつてゐること偶然ではなからう。ただ、この問題は、もっと多くの資料から判断する必要がある。⁽⁵¹⁾

もう一つ、茶碗として用いられた盞であるが、これも点茶に必要な道具であつた。『茶録』が、鬪茶つまり茶の品評に最も向いているとした兔毫盞が、詩の中でも頻見する。

上述の蘇軾の詩の「兔毛」もそうであり、梅堯臣の「次韻和」に「兔毛紫盞自相稱」という句もある。ここからわかるように、紫と形容されているのは、建盞を指すと見てよく、だとすると、歐陽修の「和梅公儀嘗茶」に「喜共紫甌吟且酌」といい、秦觀の「味茶（滿庭芳）」の上述の句に「雪濺紫甌円」というのも理解できよう。逆に、他の色彩の茶碗を詠んだ例は少ないと思われる。

ところで、茶托そのものは唐代より存在したが、建盞の場合、底面積が小さいため、我が国で天目台と呼ばれるような茶托を特に必要とした。『茶具図贊』に「漆雕秘閣」の名で茶托が載っているのも、その理由による。詩としては、既に述べた黃庭堅の「豆字頌」が関係している程度である。

最後に、点茶の特殊な形としての「分茶」に触れておきたい。「分茶」の語については、青木正児氏が『華国風味』の「末茶源流」の中で詳論されている通りであり、一種の茶礼や芸事の意味に用いられていることが多い。つけ

加えておくと、「分嘗」の語も、恐らく「分茶」の意味で用いられている。

僧惠洪の「空印以新茶見餉」に「今日城中雖独試、明年林下定分嘗」というのは、「分嘗」と「独試」を対比しているし、同じく「郭祐之太尉試新龍团索詩」に「分嘗但欠纖纖捧」というのは、「分嘗」が華やかな茶宴であり、給仕の女性を欠くのみであることを言ったと思われる。

また、青木氏は、楊万里の「澹菴坐上觀上人分茶」の詩の「怪怪奇奇真善幻」や「注湯作字勢嫵姚」なる表現に基き、これが陶穀の『清異録』に見える「生成盞」や「茶百戲」の流れをひくものだと指摘されているが、それは正しいと思われる。ただ、この種の遊芸的な「分茶」は、ほとんど詩の世界には姿を見せず、『清異録』の言う五代の頃の茶文化と、南宋の楊万里の間をうめる資料が少ないのは残念なことである。大まかな言い方をすれば、北宋の福建团茶点茶文化の隆盛の一方で、「茶百戲」の類や唐以来の煎茶法は、隅においやられていたことなのである。

3、草茶に関して

第二章で論じたように、宋代の一般的な見方として、建茶(团茶)と草茶を対比させることがよくある。歐陽修や蘇軾の議論では、概して建茶の方を勝るとしているが、後述するように、草茶の価値を認める議論も現われてくる。しかし、いずれにせよ、この両者を茶の二大類別とする見方は宋代の通例といえよう。

草茶の概念を明確に定めた文章はないが、歐陽修の『帰田録』に「臘茶出於劍建、草茶盛於兩浙。兩浙之品、日注為第一。自景祐已後、洪州双井白芽漸盛」とあり、陳師道の『後山叢談』に「洪之双井、越之日注」と並び称される

二大名茶、会稽の日注茶と洪州の双井茶を代表とした。

ところで梅堯臣の「次韻和再拜」に「誰伝双井与日注、終是品格稱草芽」というのは、双井茶も日注茶も、建茶に比べれば劣った「草芽」に過ぎないと述べているので、「草」の語感は、元来あまり良くなさそうである。さらに歐陽修の「次韻再拜」に「每嗤江浙凡茗草、叢生狼藉唯藏蛇、（原注、世代茶園多蛇、嗜人不見療）」とある「凡茗草」も同じ感じである。張舜民の『画墁録』に「陸羽所烹、惟是草名爾、迨至本朝、建溪独盛、採焙製作、前世所未有也」と言うのは、唐と宋を比較したもののだが、いずれにせよ、福建団茶以外のものを蔑んで「草」と呼んでいるのである。

日注茶と双井茶の他に、南宋の葉夢得の『避暑録話』では「草茶極品、惟双井顧渚」と言い、長興の顧渚茶を挙げている。そこで、この節では、日注茶、双井茶、顧渚茶を中心に、草茶に関する問題を論じる。同時に、これから述べるように、草茶は概ね葉茶（散茶）であるので、宋代における葉茶の飲用の問題にも触れざるをえない。

まず第一に、日注茶については、楊彦の『楊公筆録』の記事が最も参考になる。この茶は会稽山に産し、日注でなく日鑄が正しいと述べたあと、「其真者、芽長寸余、自有麝氣。越人或以沸湯沃麝、乘熱滌瓶、焙乾以貯茶牙、密封之、偽稱日鑄。開瓶麝氣襲人、殊混真、人往往不能辨。」と述べる。この文章から、日注茶が芽の長い茶であり、瓶に茶芽を保存したということから葉茶であって固形茶でないことがわかる。麝香の気を有するのも特徴であったようだ。

宋詩にうたわれた日注茶としては、まず梅堯臣の「答宣城張主簿遺鴉山茶次其韻」に「日注弄香美」の句がある。他の諸々の茶に比べて、日注の特徴を香りと外形の美に認めているとすれば、『楊公筆録』の記事と合う。

この点について、逆方向からの証拠となるのが、南宋の葉適の「寄黃文叔謝送真日鑄」なる詩の後文で、「日鑄世以香為貴、亦尚白、而文叔餉真芽、色不白、且無香」と述べている。世評とはうらはらに、本物の日鑄茶は、色も白くなく香りもなかったと言っているのである。

この日鑄茶の飲用を詠んだ詩では、まず蘇轍の「宋城辛韓秉文惠日鑄茶」があり、「磨転春雷飛白雪、甌傾錫水散凝酥」と言う。上句は磨で茶を粉にひき、その茶末が白雪のようであることを述べ、下句は無錫の恵山泉を注いで点てると白いクリーム様の茶が広がるというのであろう。だとすると、この表現は点茶を述べたものだし、その形容も、既に見た建茶の場合とさほど変らない。

一方、晁冲之の「陸元鈞宰寄日注茶」では、まず「君家季疵真槁首、毀論徒勞世仍重。争新鬪試誇擊拂、風俗移人可深痛」と述べ、陸羽以来、人々が茶に熱中し、鬪茶が盛んになったのを嘆いている。「擊拂」は『茶録』に見える語で、点茶法において茶をかきまぜることである。続けて「老夫病渴手自煎、嗜好悠悠亦徒衆。更煩小陸分日注、密封細字蛮奴送。槍旗却憶採擷初、雪花似是雲溪動」と言う。点茶の流行を批判したうえで、「手自煎」と言うのであるから、文字通り煎茶法を用いて飲んだのではないかと考えられる。また、「槍旗」つまり茶の葉や芽を見て、採摘の様子を思うというのは、葉茶だから可能な表現であらう。その句にあわせて考えると、下の句は茶湯の「雪花」を見ると、茶園のある溪谷の雲を思わせるということだ。「雲脚」そのものでもないようだ。雪のように白い花は、元来、煎茶法にふさわしい表現だが、上節で見たように、点茶の描写にも使われているので、この語からは何も断定できな

南宋の詩では、周必大の「胡邦衡生日以詩送北苑八鑄日注二瓶」があり、題名からは、日注茶を瓶で送っているこ

とがわかるが、本文は、建茶と并せて詠まれているため、具体的なことを知る手がかりにはならない。楊万里の「謝岳大提拳郎中寄茶果藥物三首」の第一「日鑄茶」には、「瓷瓶蠟紙印丹砂」とあり、茶の瓶が蠟紙で包まれ、朱の印が押してあったことがわかる。さらに「松梢鼓吹湯翻鼎、甌面雲煙乳作花」と詠んでいるが、上の句の「松梢鼓吹」はいわゆる松風で、湯の沸く音を示し、「鼎」は唐詩では「釜」を指す語であるから、湯瓶でなく釜で湯を沸している煎茶の描写と考えられる。一方、下の句は、煎茶とも点茶とも解し得る表現である。しかし、鼎と甌を並べて詠むこと自体、唐の煎茶の詩の形式をまねたものである。⁽⁵²⁾

次に双井茶について検討する。その形状については、歐陽修の『帰田録』に、「自景祐已後、洪州双井白芽漸盛、近歳製作尤精、囊以紅紗、不過一二兩、以常茶十數斤養之、用辟暑湿之氣」とあるように、袋入りの葉茶であった。この事を、歐陽修は詩でも述べており、「双井茶」に「白毛囊以紅碧紗、十斤茶養一兩芽。長安富貴五侯家、一啜猶須三日誇」と詠んでいる。この茶の流行を黄庭堅と結びつける説については、上に述べた。

この茶について梅堯臣は、「晏成統太祝遣双井茶五品茶具四枚近詩六十篇因以為謝」の中で「始於歐陽永叔席、乃識双井絶品茶。次逢江東許子春、又出鷹爪与露芽。鷹爪断之中有光、碾成雪色浮乳花」と述べている。「鷹爪」と「露芽」とは、双井茶の品名であろう。また、同じく「得雷太簡自製蒙頂茶」に「鷹爪夸双井」とあるように、双井茶の形状を示す常語であったらしい。歐陽修の上述の詩にも「石上生茶如鳳爪」とある。だとすると、鷹の爪状の葉茶を折ったところ「中有光」であったと言うのであろう。そして、これを碾で茶末にしたものが「雪色」で、たてた茶に「乳花」が浮んだというのだが、点茶と煎茶のいずれであるかはわからない。

黄庭堅は「双井茶送子瞻」で「我家江南摘雲腴、落磑霏霏雪不如」と述べ、双井茶を末茶にひいたものを雪にたと

えているが飲み方はわからない。

南宋に至ると、楊万里の「以一泉煮双井茶」が、黄庭堅をしのびつつ双井茶を煮た、つまり煎茶で飲んだことを述べる。「鷹爪新茶蟹眼湯、松風鳴雪兔毫霜。細參六一泉中味、故有涪翁句子香。日鑄建溪当退舍、落霞秋水夢還鄉。何時帰上滕王閣、自看風爐自煮嘗」という詩であり、最後の句は言うまでもなく、煎茶を言うが、「蟹眼湯」の語も、湯の沸き具合を論じているので、原則的に煎茶の語である。「兔毫霜」が「兔毫盞」を指すとすれば、点茶の具であるが、「鳴雪」と「兔毫霜」のいずれも花の表現ともとれる。この詩は、双井茶によって涪翁（黄庭堅）を思い、同時に作者も故郷の江西をしのんでいるもので、最後の二句は、蘇轍の「和子瞻煎茶」の末尾が、故郷に帰って茶を楽しむことを願うのに似せたものであろう。

また、王庭珪の「向文剛讀書齋試双井茶有懷黄超然」に「黄蠟青沙未破封、已知双井社前烘」とあり、自注に「双井老人嘗以青沙蠟紙裹細茶寄人」と記す。双井茶が「青沙蠟紙」なるものに包まれていたことがわかるが、飲み方には触れていない。

同じく南宋の方岳の「黄宰致江西詩双井茶」には「磚爐春着兔毫玉、石鼎月翻魚眼湯」なる句がある。双井茶を煮ている様子で、風爐に鼎（釜）をかけているのであろうが、「兔毫玉」がよくわからない。ただ、兔毫盞とは考えにくいように思われる。下の句は釜の中の湯が魚眼の如き泡をたてていることであるから、煎茶の表現と言えよう。

第三に、顧渚茶であるが、この茶を詠んだ句は、南宋の王十朋の「章季子教授惠顧渚茶報以宣筆戲成三絶」の第二に「白齒新芽不出山、青囊誰遣到人間」とあるのがその少ない例である。この「白齒新芽」は茶の形容としては大げさであるが、戯作だからよいのかもしれない。だとすると、この当時の顧渚茶は、白色を呈する葉茶で、青い袋に

入れてあったのであろう。

大体、太湖周辺の茶、長興の顧渚茶、宜興の陽羨茶などは、『茶経』に記され、唐代では名茶とされていたものであるが、梅堯臣の「得雷太簡自製蒙頂茶」に「顧渚及陽羨、又復下越茗」と端的に述べられているように、北宋に入ってから影が薄くなった。顧渚と双井を並挙した『避暑録話』が南宋のものであったことから考えると、太湖の茶が再評価されるまでに時間がかかったように思われる。

この経緯を考える参考になるのが、やはり南宋の方岳の「趙龍学寄陽羨茶為汲蜀井对瓊花烹之」という詩である。ここでは「三印誰分陽羨茶、自煎蜀井瓊花」と言って、煎茶で陽羨茶（後述するように葉茶）を飲んでおり、「瓊花」と言い、鳳団茶の類を奴僕になぞらえ、かの蘇軾の「和錢安道惠建茶」の詩が、建茶を賛え、「奴隸日注臣双井」と言った評語を逆に用いているもので、北宋と南宋の差を示している。

なお、陽羨茶や顧渚茶は、唐代においては固形の餅茶であったはずだが、宋に入ってから、福建の団茶が盛んになったため、逆に草茶（葉茶）となったという説がある。『増修詩話總龜後集』卷三十一に引く北宋の葛常之の文に、唐の詩を挙げて、唐の茶が固形茶であったことを示したあと、「自建茶入貢、陽羨不復研膏、謂之草茶而已」と断じている。一般の茶の形状については、簡単に言えないが、高級名茶に限定して言えば、唐代は概ね餅茶、宋代は福建団茶と各地の草茶（葉茶）の対立という図式で理解できよう。

ところで、草茶と建茶（団茶）の比較は、煎茶法と点茶法の比較と関連させて論じられることが多く、その問題は次節において述べることにする。単純に草茶と建茶の個性の差を論じたものとしては、朱熹の語に「建茶如中庸之為

徳、江茶如伯夷叔齊。又曰、南軒集云、草茶如草沢高人、臘茶如台閣勝士。似他之説、則俗了建茶、却不如適間之説「両全也」(『朱子語類』卷百三十八)とあるのが参考になる。(ここの「江茶」は江南の草茶の意であらう。)朱熹と張栻の間に、建茶の評価では意見の相違があるものの、草茶については、共に脱俗の高士を思わせるといふ評語をあてており、南宋期の草茶の位置を窺わせるものである。

4、煎茶に関して

前節で見たように、草茶は必ずしも煎茶で飲まれたわけではなく、逆に明らかに点茶法が用いられている場合もある。しかし、南宋になると、日注茶、双井茶、顧渚茶、陽羨茶のいずれもが、煎茶と結びつけて述べられているのは、偶然ではないだろう。北宋から南宋にかけて、草茶に対する評価に変化が生じただけでなく、それと微妙に関わりつつ、煎茶に対する見方も変化したと考えられるのである。

まず北宋期の典型的な考え方は、一連の茶書に見られるように、点茶法を第一とし、福建团茶以外は眼中になかった。そこで、彭乗の『統墨客揮犀』に「(唐人は)遂以碧色為貴、亦祇為之煎茶、不知点試之妙、大率皆草茶也」とあるように、点茶法を宋代の誇るべき文化と考えているのである。

この種の論調は、南宋になっても消滅したわけではなく、王観国の『学林』では、唐詩の例として、齊己の「角開香満室、爐動緑凝鑪」や丁謂の「末細烹還好、鑪新味更全」を挙げ、「此皆煎茶啜之也、煎茶啜之者、非佳品矣」と決めつけている。もっとも、王観国がこれらの詩句を煎茶の例としたことは全く正確で、それは共に「鑪」つまり煎茶法で茶を煮る釜が描かれているからである。

王観国は続けて「唐人于茶、雖有陸羽為之說、而持論未精。至本朝蔡君謨茶錄、則持論精矣」と、宋の蔡襄の『茶録』を、『茶経』を凌駕するものと評している。これらの議論は、唐代の煎茶法を低くみることに主眼があり、同時代の煎茶には言及していない。点茶法と煎茶法を並べて、その長所や欠点を比較検討するような議論は、ことに北宋の茶書では起らなかったようである。

北宋の詩人で煎茶を提唱している人物は、以上述べて来たことからわかるように、極めて少なく、蘇軾蘇轍兄弟と黃庭堅と晁沖之が数えられる程度である。蘇軾の「試院煎茶」は、故郷の蜀に伝わる古法としての煎茶を継承する意を述べ、暗に「銀瓶」で恵山泉を注ぐような点茶の華美を批判しているし、「和蔣夔寄茶」は、やはり点茶法を既に捨てたものとしつつ、薑塩を加えて茶を煮た妻子の素樸なあり方に共感をよせている。ここに共通するのは、宮廷文化から離れた茶であり、自ら楽しむ故郷の茶である。弟の蘇轍の「和子瞻煎茶」も、故郷に帰って四川流の煎茶を味わいつつ暮したいと述べ、似た主題を示している。さらに日注茶の項で述べた晁沖之の詩も、団茶文化の批判と共に、煎茶を詠んでいる。

これに比べて、南宋の茶詩では、煎茶を自然に詠み、点茶と比較するわけでない。楊万里の詩「澹菴坐上觀頭上人分茶」の冒頭には、たしかに「分茶何似煎茶好、煎茶不似分茶巧」と詠んでいるが、これは両者の長所を認めた言い方であり、煎茶は味に長じ、分茶は見た目に面白いと述べているのである。楊万里が草茶に詳しく、かつ煎茶を好んでいたことは、既に第二章で論じたが、彼の時代には、煎茶の位置づけ、つまり自然な味の草茶を飲むには煎茶法が向いているというような認識が確定していたのではないだろうか。

詩以外の資料で、南宋期の煎茶と点茶を論じたものとしては、林洪の『山家清供』が挙げられる。「茶供」の項に

「茶即葉也。煎服則去滯而化食、以湯点之、則反滯膈而損脾胃。蓋市利者、多取他葉、雜以為末。人多怠于煎服、宜有害也」とあり、茶末を直接飲み込む点茶法は、反って内臓を害すると説く。これは茶の薬効に主眼を置いた議論に見えるが、『山家清供』自体が隠逸の氣風に溢れた書であることから考えても、当時の高尚な茶の趣味と無縁の内容ではなからう。

ところで、『山家清供』に言う煎茶法は、「今法、采芽、或用碎擘、以活水煎之」と言うもので、葉茶を碎いて煎じている。これを「今法」と呼ぶのは、『茶経』以来の古法が、茶を完全に粉に引いて煎じているのに対比してのことであろうか。

もう一つ、南宋の茶を感じさせる書物に趙希鵠の『調燮類編』がある。この書に扱われている茶は、団茶を全く意識しないもので、専ら葉茶を論じ、花茶の製造法、茶の保存法等について記してある。『山家清供』『調燮類編』の著された十三世紀には、団茶はまだ存在しているものの、茶通の世界では、葉茶が前面に現われていることを窺わせる。ただ、葉茶をそのまま煎茶法や泡茶法で飲む段階までは、まだ至っていなかったと思われるが、この方向への飲茶法の発展については、以前に略論したことがあるので、ここでは省く。⁽³⁾

以上見てきたように、唐以来の煎茶法は、北宋期には、蘇軾の言う旧法として伝わり、南宋期には、葉茶の隆盛ともなつて復興してきたという大まかな見通しが可能であるかと思われる。ただ、その伝承の過程などの細部は全く知るすべがない。

さらに問題なのは、時期によって、同じ煎茶法でも、細部が異なっていたのではないかということ、固形茶を茶末にして用いる場合と葉茶を茶末にする場合では、色々と違いがあったと思われる。しかしながら、資料的には、断

片的なものしかなく、詩の表現などから、宋の煎茶の具体的な様相を検討するのは、点茶の場合と違って、極めて困難である。例えば、楊万里の詩で、日鑄茶を詠んで「甌面雲煙乳作花」と表現してあったとしても、日鑄茶そのものが、葉茶であるという以外、製法すら不明であり、どのくらい細かな茶末にされたか等も不明であり、従って、厳密に言えば、雲とか乳とかいう表現が、単なる修辭か実際の描写かすらわからないのである。固より、これは筆者の研究が不足しているためでもあるので、本稿では、これ以上論じないでおき、将来に期することとする。

IV まとめ

以上論じて来たことの中から、新たに理解できたこと、および今後の問題となるべきことについて、簡単にまともておきたい。

第二章において、宋代の主要な詩人六名の茶詩を検討したが、やはり、時代の変化を、彼らの見方の差異の中に見ることが可能であると思われる。

まず、梅堯臣と歐陽修は、蔡襄が『茶録』を完成した時代、即ち、北宋の団茶文化が最も華やかであった時代を表す。したがって、彼らの詩は、概ね福建団茶を賛美したものであり、草茶もしくは煎茶法に対しては、言及しなにか低く見ているかのいずれかである。

次に、蘇軾と黄庭堅は、やはり団茶点茶文化の中に身を置いているが、一方で、蘇軾は、煎茶の素樸さに親しみ、団茶の贅を批判する詩も作っており、弟の蘇轍も同様の立場をとっている。黄庭堅は、煎茶も嗜むと同時に、草茶で

ある双井茶を、故郷の産物として好んでいる。団茶文化一辺倒の時代に変化が生じたことを示している。

さらに、南宋の楊万里と陸游に至ると、団茶点茶は滅びはしないが、その位置は相対化され、むしろ煎茶に親しみ、草茶を味わう風が前面に表われてくる。その際、完全に明確なわけではないが、草茶は煎茶法で飲まれる傾向があるように見える。

第三章は、細かい問題を論じているため、全ての内容を再び記す必要はない。しかし、宋代の茶の変遷に関わる議論もあるので、それを描き出して記しておく。

第一に、茶の色が議論される場合、宋代を通じて、乳白色の表現を離れないが、草茶や煎茶について、独自の表現があまり見られないのは何故であろうか。（蘇轍の「秋螢」はまれな例と言うべきであろう。）例えば唐詩の模倣をして「麴塵」などの表現を使ってもよいように思えるが、それすら行なわれないことについては、説明が必要であろう。

第二に、宋初の范成大や梅堯臣の詩において例外的に、茶を緑と表現することがあるが、これは単に過渡期と考えればよいのだろうか。

第三に、北宋期に影の薄かった顧渚茶が、南宋になると、草茶の代表になってくるが、これが、明の茶文化（やはり太湖周辺の羅岈茶を重んずる）に直接つながるかどうかが。

第四に、南宋に入って、草茶と煎茶法が結びつくことがほぼ確認できたが、それ以前の状態については、まだ問題が多い。

以上の諸問題の他に、陸羽や盧仝の宋詩への影響など、考えるべきことは多いが、筆者の調査は、まだ不十分であ

るので、今後の課題としておきたい。

- 1 『東洋文化研究所紀要』第一〇九冊（以下拙論（1）と称する。）
- 2 以下の議論で引用する主要な茶書は次の通りである。『茶録』（北宋・蔡襄撰。皇祐年間（一〇四九—一〇五三）の成立。）『品茶要録』（北宋・黃儒撰。十一世紀後半の成立。）『大觀茶論』（北宋・徽宗撰。大觀初（一一〇七）の成立。）『宣和北苑貢茶録』（北宋・熊蕃撰。宣和庚子以後（一一二一—一二二五）の成立。附図は子の熊克が加えたものとされる。）『北苑別録』（南宋・趙汝礪撰。一一八六年の成立。（詳しくは萬國鼎氏の「茶書二十九種解題記」（『中国茶藝論叢』（大立出版社）（第一輯所収）および布目潮風氏の『中国茶書集成』（汲古書院）解説を参照。）
- 3 泡茶は淹茶とも言い、葉茶を湯に浸して味を出す飲み方。急須（茶壺）を用いるのが一般的である。
- 4 『東洋文化』第七〇号（以下拙論（2）と称する。）
- 5 宋代の茶を扱った近年の研究では、社会経済史方面に優れたものがある。水野正明氏の「宋代における喫茶の普及について」（『宋代の社会と宗教』（汲古書院）所収）朱重聖氏の『北宋茶之生産与経営』（学生書局）などが挙げられよう。
- 6 『梅堯臣集編年校注』（上海古籍出版社）には、一〇三一年から没年までの詩を載せる。
- 7 『梅堯臣集編年校注』卷二十七に「得福州蔡君謨密学書并茶」を載せる。
- 8 『梅堯臣集編年校注』の校語では「其」を「蘇」の誤りと疑っている。
- 9 『中国古代茶詩選』（浙江古籍出版社）の注釈では、「寒籜見重包」は、茶の芽の様子を、筍になぞらえたものとする。そうだとすると、包装の状態と二重の意味をこめているのではないだろうか。
- 10 本論の主題と関係ないが、『梅堯臣集編年校注』の標点に疑わしい点があるので、注記しておきたい。「呂晋叔著作遺新茶」の題下の原注は、「其品大窠葉収、二、葉二十六、一、郝原葉仲原、四、章坂葉二十九、二、碧原王家、二、大佛嶺游

洞、四、凡六家」と切るべきであろう。二、一、四、二、二、四がそれぞれの茶の数で、合計十五枚になるのである。

11 『茶録』の「点茶」の項に「茶少湯多、則雲脚散。湯少茶多、則粥面聚」とある。

12 胡麻と茶を共に煮る風習は、後世の擂茶の淵源と考えられるが、早くも南宋の袁戈が、『甕牖閒評』で、この詩を引き、「余生漢東、最善啜點茶」云々と述べている。

13 四川の雅州の蒙嶺に産した茶。蒙山茶とも呼ばれる。

14 『茶録』の「炙茶」の項に「茶或経年、則香色味皆陳。……以鈐箝之、微火炙乾、然後碎碾。若当年新茶、則不用此説」とある。

15 『帰田録』に「臘茶出於劍建、草茶盛於兩浙。兩浙之品、日注為第一。自景祐已後、洪州双井白芽漸盛。近歲製作尤精。囊以紅紗、不過一二兩。以常茶十數斤養之、用辟暑濕之氣。其品遠出日注上、遂為草茶第一。」とある。

16 『茶録』の「炙茶」の記事を見ると、(注14参照)年を経た茶も飲むに耐えるようである。逆に、陸游の『入蜀記』には、混ぜ物のある団茶は、梅雨を過ぎると質が劣化するという。(「惟過梅則無復氣味矣」)長く味が変化しないことが、上等の団茶の条件であつたらしい。

17 上句は、『茶經』「五之煮」の「其沸、如魚目微有声為一沸」および、皮日休の「煮茶」の詩の「時有蟹目濺」による表現。下句は、同じく「煮茶」の「声疑松帶雨」などによる表現。

18 『茶録』の「候湯」の項に「候湯最難。未熟則沫浮、過熟則茶沈。前世謂之蟹眼者、過熟湯也。況瓶中煮之不可辯。故曰候湯最難。」とある。「蟹眼」を「前世」の語としているのは、それが煎茶の用語であり、点茶には用いないということであろうか。

19 張又新の『煎茶水記』に、劉伯芻の定めた名水と、『煮茶記』に載せる陸羽が定めた名水の両方を記すが、無錫の恵山泉は、ともに第二位になっている。

20 拙論(1) 249頁参照。

21 廬全の詩に「三碗搜枯腸、惟有文字五千卷」とある。

22 『茶経』の「六之飲」では、当時、葱、薑、橘皮、茱萸、薄荷などを入れて煮た茶があったことを述べる。塩は『茶経』では用いられているが、『茶録』では用いていない。

23 Ⅲの4「煎茶に關して」に引く王観国の『学林』の議論を参照。

24 『茶経』「五之煮」に「第二沸、出水一瓢、以竹筴環激湯心、則量末当中心而下」とあり、湯をかきまぜる竹のはしが必要とされた。その造りは、「四之器」によれば木製で長さ一尺である。拙論(2) 166頁参照。

25 拙論(1) 249頁参照。

26 ここで「水脚」は、『茶録』の「水痕」にあたるものである。『大観茶録』に同様の用法が見える。Ⅲ2、「点茶に關して」参照。

27 「箇中」は、この中の人の意だが、ここでは一人称であろう。「渴羌」は『拾遺記』に見える酒好きの羌人の呼び名。

28 張又新の『煎茶水記』に引く『煮茶記』の陸羽の説では、廬山康王谷水簾水が第一とされている。また、注19参照。

29 後述するように、晁冲之の「陸元鈞寄日注茶」では日注茶を煎茶で飲んでいようだが、いまだ明確ではない。

30 『顔魯公文集』の「杼山妙喜寺碑」によれば、杼山に黄檗澗があった。

31 例えば唐庚に「嘲陸羽」の詩がある。

32 厳密に言えば、陸羽の茶は固形茶であるから、散茶である草茶を陸羽が提唱したわけではない。しかし、宋代では、唐人の飲んでいた茶を草茶と呼ぶこともある。『画墁録』に「陸羽所烹、惟是草茗爾」とあるのがその例で、やはり建茶に対比しての表現である。

33 『杭州国際茶文化研討会論文摘録』(補記参照)に戴盟氏の「茶詩二百補△茶経▽——淺談陸游的茶詩」を載せるが、残念

ながら概略のみである。

- 34 「紅絲小礮」は陸游が好んで用いていた茶磨で、江西と広東の境の大庾嶺に産する石で作り、紅い筋が入ったもの。
- 35 『唐書・隱逸伝』に「陸龜蒙嗜茶、置園顧渚山下」とある。
- 36 原文は「建茶与雜以米粉、復更以薯蕷。两年来、又更以楮芽。与茶味頗相入、且多乳。惟過梅則無復氣味矣。非精識者、未易察也」である。
- 37 楊万里の「謝福建提举仲実送新茶」には「蒼玉腴」の語がみえる。
- 38 拙論(1) 254頁参照。
- 39 『大觀茶論』の「鑿辨」の項に「即日成者、其色則青紫。越宿製造者、其色則慘黑。有肥凝如赤蠟者、末雖白、受湯則黃。有縝密如蒼玉者、末雖灰、受湯愈白。」とある。
- 40 『茶録』の「色」の項に「茶色貴白。而餅茶多以珍膏油其面。故有青黃紫黑之異。」とある。
- 41 拙論(1) 254頁参照。
- 42 製造工程の詳細は『北苑別録』参照。また拙論(1) 256頁参照。
- 43 拙論(1) 255頁およびその注13参照。
- 44 茶磨を詠んだ詩としては、蘇軾の「次韻黃為仲茶磨」、秦觀の「茶臼」などが挙げられる。
- 45 拙論(1) 256頁参照。
- 46 『鶴林玉露』卷三で、羅大経は、同年の李南全の論を引き、補足を加えている。両者が作った、湯の沸かし方の口訣の詩を載せているが、ここでもやすとされているのは、完全に聴覚的なものである。
- 47 『中華名物考』所収の「名義瑣談」参照。
- 48 『茶経』「七之事」に引く『後魏録』に王肅の語として「茗不堪与酪為奴」とある。この話は『洛陽伽藍記』にも見える。

49 注26参照。

50 『茶録』の「茶匙」の項に「茶匙要重、擊弘有力。黄金為上。人間以銀鉄為之。竹者輕、建茶不取」とある。

51 なお、元の謝宗可に「茶筴」の詩がある。

52 拙論(1) 249頁参照。

53 拙論(1) 262頁以降参照。

(補記) 一九九〇年、十月二四日と二五日に、湖州市において「陸羽茶文化研究会成立大会」が行なわれ、十月二五日から二七日まで、杭州市において「杭州國際茶文化研討会」が行なわれ、筆者も参加することを得た。両学会とも、討議資料として、相当量の論文が配られ、茶史研究の盛んなことを示していた。陸羽茶文化研究会の資料は、油印で、いずれ活字化の予定とこのとであった。(一部の論文は、『湖州師專學報』一九九〇年第三期に既に発表されている。)一方、杭州國際茶文化研討会の資料は、活字印刷の冊子『論文摘録』が配られた。いずれにせよ、国外では入手困難と思われるので、現在の中国の茶史研究の動向を示すために、ここに、論文の題名と著者名を記しておく。

1、湖州陸羽茶文化研究会會議資料

在湖州陸羽茶文化研究会成立大会上的講話

湖州陸羽茶文化研究会籌備經過

陸羽詩文雜談

中国茶文化的光輝篇章——追溯顏真卿、陸羽、張志和在湖州的交往

△茶經▽書成茗嘗間

陸羽思想性格分析

宋詩より見た宋代の茶文化

董淑鐸

朱乃良

戴盟

丁克行 張葆明

羅家慶

冠丹

試論陸羽《茶經·一之源》中的“上”與顧渚紫笋

林盛友

陸羽與紫笋茶

王林福

“紫笋”二字命名初探

沈元祥 章金龍

湖州的名茶在興起

從《茶經》記述論安吉茶葉

程雅谷

杼山考*

張葆明

陸羽隱居的苕溪即今西苕溪——苕溪溪名沿革初考

陳多士 朱文正 張軒德 傅明

從歷史的積淀看杼山*

蔡一平

漫讀古詩話杼山

任秀士

杼山與夏駕山

謝文柏

湖州的山水人文孕育了《茶經》*

羅家慶

陸羽《茶經》與皎然論茶

高萬湖

談皎然的咏茶詩——兼探陸羽《茶經》的著作環境

邵 鈺

試析陸羽生世之謎

羅家慶

茶文化撫談

錢大宇

漫談茶葉文化

段敬堂

陸羽與參軍戲

趙天健

茶與湖州曲藝

張志良

從《紅樓夢》看清代的飲茶習俗

張西廷

且談湖州茶文化與發展旅遊事業

飲茶與保健

茶文化與包裝

顧渚貢茶院——中國第一箇茶葉加工廠

論唐代湖州民窯茶具——兼答多田侑史先生關於茶具研究的課題

湖州發現漢代晚期貯茶瓮

顧渚摹崖石刻是長興茶文化的精華

從日本茶道看中國茶文化

“開茶”與“茶道”

偉人愛茶

峴山窪樽亭聯句資料

張志和西塞山之爭

晉溪灣裏釣魚翁——張志和《漁父歌》寫于湖州

(* 印をつけたものは、『湖州師專學報』一九九〇年第三期に掲載。)

2、杭州國際茶文化研討會論文摘錄

世界飲茶文化的起源與流派

論中國“茶”字的起源

中國茶葉文化的發展與傳播

唐代在茶文化史上的地位

宋詩より見た宋代の茶文化

錢 樸

李師華

王 覺

謝文柏

邱鴻妍

閔 泉

謝文柏

沈元祥

章金龍

費在山

蔡泉宝

邵 鈺

邵 鈺

蔣琦亞

王郁風

張堂恒

王家斌

顧 風

飲茶起源與文化變遷新探

陳 璵

中國邊茶史略

陳彬藩

茶名源流考

周文榮

杼山考

張葆明

湖南黑茶史話

施兆鵬

黃建安

△龍井茶及其它——浙江名茶與文化▽內容簡介

阮浩耕

介紹幾篇茶史、茶文化論文

陳文華

茶名的考察

釋龍雲

中國茶文化的形成與早期發展

王 玲

唐宋文人與茶——兼論中國茶文化的形成與發展

安平秋

“茶人之家”與茶文化

陳觀滄

名人與名茶

錢時霖

李壽林

△陸羽研究▽內容簡介

歐陽勳

茶詩二百補△茶經▽淺談陸游的茶詩

戴 盟

△茶經·一之源▽“其字舊注”考辨

于良子

湘陽茶略考——兼論大衆茶文化

曹 進

初論茶文化

王群力

試論當代“祖國傳統茶文化”的弘揚

王君培

試論杭嘉湖的茶館文化

蔡泉寶

茶葉文化及茶葉的傳播

韓國茶文化史的考察——第一步高麗時期以前

四川邊茶與藏族茶文化發展初探

從傳統飲茶風俗談中國茶德

中國綠茶的沏泡技藝

黃庭堅和茶

飲茶活動與其文化內涵

煎茶道與黃檗東本流

陽羨茶與紫砂壺

雲南民族飲茶方式與特色

中國茶葉與日本茶道

茶葉源遠流長——令人心曠神怡——中國待人接物之禮節

茶樹原產地的用茶、飲茶習俗

茶葉的藥理作用

茶、茶色素預防動脈粥樣硬化的研究

中國皋盧（苦丁）茶的源流及其真偽考

中國茶葉博物館陳列方案的初步論證

陸羽性格思想論

中國人與茶

宋詩より見た宋代の茶文化

松下智

孫曼伶

劉勤晉

程啓坤 姚國坤

童啓慶

馬舒

莊任 吳雅真

小林代鶴

張志澄

魏謀成 蘇芳華 王樹文

朱佩明 周金龍

丹下明月

張芳賜

林榮一

樓福慶等

陳興琰

陸鈞

寇丹

郭雅敏

(当日配布された資料については省略した。)